

續後拾遺集

132

133

134

1. The first part of the book is devoted to a general

description of the country

and its inhabitants

and the second part to a detailed account of the

history of the country

and the third part to a description of the

climate and the soil

and the fourth part to a description of the

mineral resources of the country

and the fifth part to a description of the

續後拾遺和歌集卷第一

春哥と

春の心はよみ分け

前人納言為世

けしよわの春に思ふわの年のまゝつとをいじらぬ

歌一歌す

后二位家隆

初めきりすともまぢく春向乃ゆいこのわけは春に

立春乃奇うくくよみ分け

前人納言為家

いとしくも春こちくく初あきるかくよ雪は降り

春乃初の哥

源信明朝

の野心はよみ分け後ををあさ春のまゝかたを

歌一歌す

人中尾能宣朝

あはよみゆきわつと春のわなをいじらぬ人のまゝ

柿本人丸

春の心はよみ分け逢坂のゆいを鳥の夢は初れ

用路早春といつと心はよみ分け

後宇多院御歌

相坂乃ゆいをまりのまゝなまゝあはらもゆき春にま

春まはるは春にま

讀人不知

青鳥の鳴く声はさうさうとあつたに似てゐる

とくしあふ

中務卿具平親王

賞状の紙を縁の野へまきくるとさうさうとあつた

初書ころころとあつたよきとあつた

卿親

朝日の子はさうさうとあつた

谷書と

後二重院卿親

さうさうとあつた

とくしあふ

よきとあつた

青鳥の鳴く声はさうさうとあつた

女卿殿子女とあつた

壬辰忠見

わが書乃こころをさうさうとあつた

女卿殿の屏風

純貴

賞状の紙を縁の野へまきくるとさうさうとあつた

とくしあふ

後一人

さうさうとあつた

嘉元二年後宇多院とあつた

春雪

民部卿為友

吹まゝの磯やうらわしき春さうて無に塩あひの雪は

月一四を

前大納言為世

春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

後九条の久良家と又首言よきふける付去飛

野

後二位家隆

春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

建保二年の久良家百と云に朝もあま

前中納言の久良家

こゝろゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

歌一節も

よみ人

り野さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

小野官太夫也

春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

春武司の中に

惠度法師

東路の春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

ゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

春さうて

光明寺の僧師也

春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

春さうてゆきしと山思ふ草乃其の秋葉のわら言えさ

讀人不忘

ちくちく夜のすそを思ひしに野火も出くしけらるるを

三百六十首并々中々

曾祿好忠

ちと染じし春の澤田もあつこく夜乃十その思我思ひ

うらみそ

中務卿宗尊親王

掉姫乃ころもほそを思ひ春の日はさわかよあじ天のかくし

和平所へく釋阿に九十賀あつしけり時屏

凡そ

人藏卿有宗

ちくちく乃のちのちを思ひしに野火も出くしけらるるを

文保三年後宇多院より百と一首をけり時

国白太政大臣

ちくちく乃模のすそを思ひしに野火も出くしけらるるを

正治二年後鳥羽院に百と一首奉けり時

皇太后宮人丈後成

ちくちく乃のちのちを思ひしに野火も出くしけらるるを

春の三つ中々

前大納言為氏

春のちとちやちよけき故のちの野のちとちやちよけき

左大將もあけり時伊勢の勅使にちとちよけり

よ時坂をすくこころ

後京極権政前左大臣

逢坂乃山とててふの山に我が庭よりくまのついで

赤元く年後宇多院より言はけるは

入道前左大臣

わたりてはたしむる所の所はたしむる所は

文保三年百から言はけるは

権中納言公雄

くまのついでにたはるの二つにきりては

名所尋よとてはける中

津守國助

伊波のわたりてはるのまはたしむる考のついで

和歌所より釋阿に九十頃流りては

屏凡よ

後鳥羽院定ゆる

ちりくこやとてはるのわたりてはる考のついで

考の御尋の中

後鳥羽院御製

納めとてはるのついでにたはる考のついで

文保百から言はける

前入納言為世

塩凡乃をしらとてはるのついでにたはる考のついで



前入僧正道玄日吉祐りくくくくすすめけ  
及廿一首等の中に

源兼氏朝也

よかの海にさざくらと白波のうらたのぬく春はうよく

麗景殿女卿のうたのうらた

平兼盛

らけ乃みくゆら我が春はも若れ水いじりくくくく

春等の中にも

後光明寺も前持ぬた久末

かよはわわのわの笑を吹はよみくくくくくくくく

柳をよりとよぬく

後鳥羽院御製

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

家よ十肯うよみゆけくく柳家

山階入道た久末

まは娘乃うらたの糸をよりひて家の玉也く春の言柳

女卿殿子女は家等今も柳

壬戌忠見

き柳乃糸いさく我て春くくくくくくくくくくくく

高元く年百らうをよける時り心

二品は親と之助

わは柳のみくくくくくくくくくくくくくくくくく

乞ふ所す

前中納言為山家

春のりたえとありて玉かじりてひくかすてふ青柳の糸

竹助は親之家又十背よりよと依けり時

後西園寺入道前左大臣

月吹やまこの糸た玉とてつとめりてふ春のあさか

謀子に祝之家の言今も梅始用とていへ

よと人てはか

初やわくろ風のうらひと春けい風のまも梅の花とては

建仁元年後鳥羽院よ又十とて言ちけり所

前中納言定山家

白妙乃神のしう思ふ美ふにむみこの糸た梅の糸にむ

乞ふ所す

順徳院卿製

あつまくにあれりてう梅花の糸たにむえう嘗のふく

二月乃此梅の花のしとくもえは

土原棟梁

色しとげら梅の糸にむとあふくは糸たむとて

乞ふ所す

中納言家持

梅の花ちりりて実敷妙のほくも我にむとて

古那門院卿製

みの野花はわくも鷹のしとてちとてはとて

百首言のたれにわく

御製

道一われどののりちの古郷とあり春しつるのたれ

長久二年弘徽殿女御の年令はゆるを

伊弉大補

行えとわくくゆるる入まのくもわりのに成りしけり

弘長元年後堀城院は百首言の事とまに

けり付月一を 常磐井入道前令政大夫

天龍寺井の居たるうまをわくちのしにては

春言の中は 前中納言定家

里のわさ乃塩まきしつとまのつふれとまをわくの居

うのをのこも十首言のしつ時帰るを

右長兼増為定

掉娘のしつりりな考ししうまのつみやまのやまゆり

堀河院は百首言のしつは早蕨

人納言云實

春日野の草葉はやくまのくまのつとまの早蕨

私言所はく釋阿は九十賀のしつは

屏風は 前人信正慈慈

雪きして入るまのめも春凡にしのく野の萩乃焼

歌一巻に

藤原隆信朝

とて書乃厚しのよを初ゆをいふひの京よきつし鳴や

野春面を強々

藤原隆祐朝

境乃上のあつこの京にわきみしつらむる廣く春面をあふ

春面を

清原保春又

春面やあつこつらむる春に成るのつらむるあつこつら

歌一巻に

前大納言為成

春もや一廣きふぶくつらむるのそはゆのよ花つて笑ふ

百首よりよりとぬけるも梅を

二使中御

いひつらむるつらむる春もあつこつらむるのよ花つて笑ふ

尋ら花つて笑ふ

藤原基俊

いひつらむるつらむる花もあつこつらむるのよ花つて笑ふ

花の音してよあふ

贈三信為子

いひつらむるつらむる花もあつこつらむるのよ花つて笑ふ

建保四年にむかひに又つらむるつらむるつらむるつらむる

春議推延

いひつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる

初見花つて笑ふつらむるつらむるつらむるつらむる

伏見陸柳軒

笑うしろ外山の花は夕夕してゆきまのくはまの白雲

歌一冊子

藤原為道朝来

さくさく花咲ゆきまのの山有るまのわくをまうの秋

衣笠前の人世

梅むいよさくさくし青柳のうさくさくまをうの秋

前中納言庭房

白中乃さくさくし山花のくさくさくは花咲まを架

花満るはくさくを

之明幸ち入道前拾取左大臣

り野沖いさし梅咲まをさくまのりくはくは花の白浪

歌一冊子

法中定為

春凡よい山の花は夕夕してゆきまのくはまの白雲

家と花又す昔言よを休けの中

後京極拾取前左大臣

谷けをうらいにくさくさくは花の

まの梅よなちまけの

續後拾遺和歌集卷第二

春哥下

よ音。歌よりとぬうけりよ

後宇多院御製

まゝも乃又百首のうらみしにふゆしのしら梅をわきと

元年二年亀山院殿よりく人へ歌をさくく

さ千首等しいうらみしにふゆしのしら梅をわきと

前人納言考也

みらまうよさううらみしにふゆしのしら梅の花の白く

歌一冊子

院御製

朝ふく外しのせううらみしにふゆしのしら梅の花の白く

百首等しい

前人納言實教

まほふまはいさううらみしにふゆしのしら梅の花の白く

和言所より釋阿日九十賀及びしける所の屏

凡よ

赤識雅行

久々の雪ふらうまのしら梅よりふゆしの春のわきを

弘長元年百首等しい

前人納言考也

花乃まはうれこもみしにふゆしのしら梅のよきつるせし春のわきを

雪のうらみしにふゆしのしら梅のよきつるせし春のわきを

きし梅こりしつしそ

源後頼朝

雪消思ふの煙こみけりしそとみよじし梅ふるは  
又保直のうきけりし

藤原久成

ゆき消さるる煙こみけりし梅ふるは  
律中園

こけりし雪のうきけりし梅ふるは

歌一首

後惠法師

ゆき消さるる煙こみけりし梅ふるは

三條入道久成

ゆき消さるる煙こみけりし梅ふるは

け花をよみとみよじし

卯歌

け花をよみとみよじし

名所百首

藤中納言定家

け花をよみとみよじし

元亨四年

三月十日

江戸長祿

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
前納言定房

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
二位家隆

歌一八

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
律也國助

律也國助

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
花は心不静

花は心不静

和泉式部

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
永義又年祐子

永義又年祐子

藤原兼房朝

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
後におぼし

後におぼし

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
龜山院御製

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
中務卿具平親

あまのつゆを乃とて霞にまじりて  
あまのつゆを乃とて霞にまじりて

あまのつゆを乃とて霞にまじりて

あまのつゆを乃とて霞にまじりて



持中約言云宗母

中のこみく〜とらり梅花ちる〜の〜

馬鞍中花を

後西園寺入道前を教ふ

はつふふや〜おひ〜山花〜春の〜

歌〜子

伊勢

みろみすいあ〜あ〜おひ〜山花〜

鳥羽院白川は御幸あつ〜花片ら〜

よ〜あけ

前赤藏教長

白〜るに〜ち〜思す〜の〜春日の花のあ〜

花乃幸の中〜

西行法師

あ〜野ら〜花をみ〜日よあ〜

花見よ甲〜あ〜よ〜あけ

よ〜あけ

あ〜子〜し〜ふ〜山梅花〜あ〜

歌〜

源道綱

本乃〜し〜ふ〜山梅のら〜

元亨三年七月梅山殿〜

〜七百日〜

藤原為朝

あ〜い〜の〜ち〜る〜乃〜衣〜

花下をゆきふりしと

源兼氏朝長

日下をゆきふりしと花下をゆきふりしと

亭子院言合の言 人中に頼基朝長

志のあふふりしと花下をゆきふりしと

伏見院言合の言 花下をゆきふりしと

日 前大納言俊光

きのふのふりしと花下をゆきふりしと

花下の中よ 津守國直

きのふのふりしと花下をゆきふりしと

花十首言ふふりしと

贈左大臣長實

きのふのふりしと花下をゆきふりしと

歌 典は親子朝長

きのふのふりしと花下をゆきふりしと

同是院入る取用白々人長

吹月がやまのふりしと花下をゆきふりしと

久安六年崇徳院言首言ふりしと

人炊市門右人長

花乃ちのふりしと花下をゆきふりしと

花奇中に

寂知法師

年をへくに我れきよきよの梅花ちるまじくしんちりありきや

天徳四年の裏言の合の三

兼盛

つゝ宿よの寫つてくなくたまに庭もさつては花が教は

亭子にたまり合よ 元けり躬恒

さみみては凡なるのこ青柳のかひくくさう花はあけ

歌しこ子

順徳院の歌

あはるふよとの梅をよこほき虫さうめわ信の白糸

落花をよえろ 承久約言終結

ささげら多きともみすけの野河のささげら花は白波

承久信正道州

志乃のまは袖しみれは凡のあてくく想花のうら波

各所百首のうまけりしこ

身今后宮人妻は忠女

孝くこころせよ梅の花はちのわしりうさかじりしん

志気百のうまけりしは花

贈辰之信為子

あはるふよとの梅をよこほき虫さうめわ信の白糸

みる水は花乃ちりしりしをみくよまおけり

枇杷左大臣

友花をわしけりゆゆしき我がくつてのこころをみく人ありを我  
落花のひを  
藤原為親納を

雪のこ花うちりふ白まにゆりしに種を並ちちん  
大宰大貳を家

とくは水かづよは色けいじしこのよしは雪にゆき  
みく舟よとれとぬうけり

ちり又雪しぬゆく梅もまいつくはひのじしきさ  
みく又まはまけりつ花のうらうらとぬうけり



伏見陸奥製

本乃ししよふ人けりてい年よつとぬ考のこふむの白雪  
歌しうす  
西宮左大臣

ゆらゆら花も有をて春凡の吹てゆりし後とみく  
枝後縁朝つ伏見家とく人くうよとぬけり

見花こころを  
後中納言通後  
古乃乃人ぬいりかこゆりしゆりしちぬ花のゆき

歌しうす  
人丸  
梅花しらすいぬ我がついついふろし乃うらにぬいぬとふ

後京極持政前左大臣

又もまはたしつゝもきらぬ御代はまのり乃月に凡ふるや

正治二年百々奇きけるは

前中納言定家

花乃かみより月日わくつれて春もさうらひくも花

元亨三年八月十又後半ゆは月又十

の奇きける付 二忍は秋に賞勅

身はわらわめくとも花の折をきえうへく三月をみわ

考の考の中よ 能宣納ま

花ちりめくじりともみ之常よりともやけく照を考のく月

ふしよほりくも動くくして月をきし流る

前大納言公俊

こもよやく月めりあを細りしを考のしつを誰よこいす

元亨三年八月十又九月又十も奇きけるは

前中納言公雄

いづくのいじりよは結くしてほり氣のすむいさよひの月

春月を 平宣は朝

考乃よんもむけしひと思ふにけりあはつる月の氣ふ

謀まの親の家言合よ度隔月こいさしを

中務

新しきまうくとも考のく月かう人いみえりわける

寶治二年百首三つめ、此けるしめくも春月

後嵯峨院御歌

しりし歌わつとどわめの月々しき春のあまう有る

浦春月といふ心を 後二季代は御歌

春あゆむたもるる浦式春の月煙のほろもよむじやるを

歌一節す よみ人

ちりくこをらつとつたふらふら董摘と昔口くし

前中納言実宗

春あるる野のなつたすみれけきぬゆの袖あつた

よみ人

後春のあつた春あつたしきめつたしきめつた

百首草の中、源重く

ふきしり井のの蛇さすくやあが火を誰あつた

寛和二年に裏言今も歌を

藤原雅成

蛙あつたのつたつたつたつたつたつたつたつた

堀河地百首言はあつたつた

中納言師頼

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

歌一節す 後鳥羽院御歌

考るに思代しくもく睦みくまにのふ川に歌をの花  
太神言はまけらる百首言中は歌をを

前人信正慈鑑

し候乃ちう成納まの程りりかむとみきくおの何波  
西中後をう免ら 平外は

いしくみら袖也れも考るまなまのうら松の藤を  
浪言祐よみくまけらる百首言の中は後

前人納言為家

まふつと誰のみくし浪言れ松は花さくちのちのち  
まえ百首言まけらるは甲<sup>名</sup>や成

は中実考

ちとる海のわつらうよすらに波たこに白く考の海後  
百首言ち一付 前人白た大長

御覧

考日のつじしんこの初草はかゝぬまよこけら後を  
歌しおす 前人納言為氏

かふれい考いくりとかりをアわすれは花の移しよこ  
文保百首言ち一付

前人納言為世

きつておんがしんぞくしてはたより後考のゆ<sup>から</sup>ゆ

二月盡當のりふ〜とふん

藤原信實朝亮

ふの〜身つ考の志にたのわ〜お

當のこ儀

續後拾遺和歌集巻第三

夏尋

建仁元年又十昔言ちりは

前中納言定家

保色乃神と云し〜よりゆ〜移を〜るる月日を

云し〜お守

源重〜

〜は〜は〜は〜花の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は

一文院法女お守し〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は

し〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は

紫式部



今更日向ふをみれば遠極つとわたくましくまつては春のしを思  
まほしき極をみくくよみはけり

道令法師

いづれもわづら極をみく考れ申すかたのこゝろを乞

禊子の親と家共言合し卯む

よみ人しおと

卯花乃さうりちるいふのこゝろは誰かあつてめまじ

元亨四年夏月後宇多院より十三年奇せけるは

卯花

民部卿為友

夏衣りしよとまはる玉川のわづらす波にさける卯む

又保百と奇せけるは

前中納言為相

卯花乃咲ちるらんやとをけりしは彼も厚きをゆり

久安百と奇せけるは

皇太后及大史後成

よ早なる頼しの祐は養草かみんふし成はけるかふ

乞

順徳院の製

ゆれりし花乃おしのわづら草のこゝろちるはあつて

百と奇せるとはけりし中よ

後二重院法師製



三十一

前参議雅有

~~~~~年ふけれは鳥鳥は思ふのついでに

前参議為實

~~~~~寸ふは是を~~~~~

中務の宗尊親の家百三の中

前左兵衛督敦定

~~~~~を切~~~~~を没~~~~~

和三所~~~~~釋阿~~~~~

参議雅行

~~~~~は鳥鳥は思ふすれは~~~~~

三十一

大炊左門右大臣

~~~~~の言~~~~~は鳥鳥は思ふの~~~~~

~~~~~は鳥鳥は思ふ~~~~~

御親

~~~~~は鳥鳥は思ふ~~~~~

~~~~~は鳥鳥は思ふ~~~~~

中務の宗尊良親

~~~~~は鳥鳥は思ふ~~~~~

~~~~~は鳥鳥は思ふ~~~~~

入道前左大臣

おはせりまゝにございませう。お島にいらしては物言なす。

可いございませう。右き末替有らぬ。

に我々もいせひとて入るは島にわら鳴きな何まゝに我々

おはせりまゝにございませう。お島にいらしては物言なす。

贈戻之位有らぬ

うし身もくもくも物言は島推しとてをよすは

信よおはせりまゝにございませう。お島にいらしては物言なす。

おはせりまゝにございませう。お島にいらしては物言なす。

白河陸上警察

夕白のすゝめをよすは島にいらしては物言なす。

お島にいらしては物言なす。前大位正慈録

いへりまゝにございませう。お島にいらしては物言なす。

海を越えりまゝにございませう。

指律師實性

お島にいらしては物言なす。お島にいらしては物言なす。

お島にいらしては物言なす。お島にいらしては物言なす。

お島にいらしては物言なす。お島にいらしては物言なす。

人納言経信

お島にいらしては物言なす。お島にいらしては物言なす。

元亨三年七月七日。お島にいらしては物言なす。

七百の尋にけりぬにけりぬはあはれ鳥飛ぶ

権中納言と雄

いさよわくら入ひやのしぬあ乃ういさくくふのしと郭と

臥しし子 平宣可朝来

一夢よわくらこきけいしは鳥居は原の月の鳴る

よき人し子

引し子わすし有かむうを三上の史の司しと

郭をよめる 堀河院中宮と信

はししに二村のししにわをくすのそなれあや

品は初と夢えの口書の屏凡と

前大納言為世

引し子一夢打ししし思のわりの梢を合しと

臥しし子 昨慶門院一条

西すくろカカ乃梢は夕家よなるしわしと

家と尋合しはけは郭と

左京人吏頭補

は鳥居しし心わらしとあ乃いしとあしと

おろし心 宣言典は

わすし子同んわらしとあしとあしとあしと

中納言行平家三つ合と

よき人〜とよす

<sup>奴</sup>よそ<sup>の</sup>又<sup>の</sup>他人わ我つは鳥人のしたを乃きとそそ

和言所〜く釋阿は九十賀わつとける付の

屏凡は

後鳥羽院作製

ふろ〜と今つやま〜と郭云いつきさり〜とあの子人

弘長百の言をけるは郭云

前大納言為成

わが手乃よそ〜と好<sup>郭</sup>阿<sup>云</sup>こ<sup>の</sup>氏<sup>は</sup>た<sup>は</sup>た<sup>と</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>ら</sup>ふ<sup>か</sup>ら<sup>く</sup>

阿<sup>の</sup>〜<sup>を</sup>

と京元方

とゆり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

郭云早の〜と〜と〜と〜と

前中納言建房

わが方〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
<sup>郭</sup>云

歌〜と〜と

津守國友

は〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

元亨三年七月迄の殿め〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と七百日〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と

前大納言為世

〜と〜と又〜と〜とわ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

寶治百の言をけるは〜と〜と〜と〜と〜と早苗

後醍醐院志

長元二年四月の事なりと云ふは其の事なり

又保元三年の事なり

指中納言宗母

ついでに昔の事をも板の袖の事と云ふは

盧橋を 平維貞

橋乃と云ふは其の事なり

承暦二年の事なり

保元 指中納言宗母

に我くとも又月るより云ぬ水の事なり

私言所しく釋阿は九十願ありとけり屏風

人後堀有宗

と云ふ事なり

白き事なり 用白左大臣

水田さうらに云ふ事なり

赤毛白き事なり

万林門院

あすの川わき風たる事なり

長元三年の事なり

前納言有宗

大井河書局のうらやいふまのふんをれいのころこれのころ  
又保百のうらやいふま

入道前をぬえた

おら庵の火のころは川にまきしころから又月をぬえり  
寛治百のうらやいふまは後又月を

後二位の家

又月をぬえのころは川にまきしころから又月をぬえり

又月をぬえ

中務の宗尊親と

お浦河のうらやいふまのころは川にまきしころから又月をぬえり

後二位の家隆

おかき<sup>お</sup>のころは川にまきしころから又月をぬえり

お寺所<sup>お</sup>のころは川にまきしころから又月をぬえり

前中納言の家

又月をぬえのころは川にまきしころから又月をぬえり

歌<sup>お</sup>のころ

祐子親の家

おら庵の火のころは川にまきしころから又月をぬえり

お長百のうらやいふまは後又月を

常盤井入道前をぬえた

おら庵の火のころは川にまきしころから又月をぬえり

お百番のうらやいふまは後又月を



ふけりほよの又月のりししよよぬれぬかきわりのほ  
又月晦日は海鳥の鳴けけりよよはけり

よき人よ

今しておても思ひしりしと誰よ別ををししは

歌よ

まよるけるすのわりの海鳥鳴をきけりよよ

夏乃くはるのわりの切也一は秋の月れ種をるよ

宰相曲也

足引乃のわりの秋をじいけり月のをうす

邦有親と家又十と号よ夏月

元中納言唐雄

休るふるにけり乃のまに明るよはゆのりよ

元亨四年又月後宇由院よ十と号けり

忠房親と

夏乃乃玉江のわりのりしにみるよは月の氣ハ

祝部成茂

夏乃くはるの種のをよみ果也よ切るよ

建仁元年又十と号けり

後京極坊政元を改大良

うのひ船くすこちよのみる我掉さし種をく明るよ

夏亭中の日 女忠

夕園よわまのいぢりやみいひかほつゝの塙の草ふりやち  
三冬流みくろまこ申ける村帯の陣の音なき  
草  
よみ人  
ふもつゝいぢりやみいひかほつゝの塙の草ふりやち  
各所百首言せけるは

元中細言の家

そつてつらつちやめらふにはよおまのいぢりやみいひかほつゝ  
歌  
ゆんた  
秋ちつゝ澤の草の夕暮よえりつちいりつゝるちやちを

志元百首言せけるは宝

休庵隆教

娘をいぢりやをみまきく夏草のなまよりの秋すゆく草小  
又保百首言せけるは

後二信宣子

志けりやわら草葉の外は白をいぢりやのりつゝるのえちをいぢ  
歌  
中言

歳つわら草葉の外のなをいぢりや名あもこめお夕暮のえ  
天台庵の承賞は親

ちり神のちりつゝるいぢりやの外のなをいぢりや夕暮をいぢり

堀河院百々子と泉

元中御言足原

ふいふとけとつにぬきふららの清水をたきし  
又保百々子とけり

津守國老

くらふと海へ成く蟬の飛たふの夜よひに

河邊納涼とて

後西園寺入道前左大臣

夕よ我松草の月の音母河あつと海への  
元亨三年七月西山殿より

十七百々子とけり

後宇多院左御

駒のめくとりすむらうらつらひのくは河の水は白浪

六月後をよみとけり

新院左御

みうらけのふりてし

六月がすも更を

續後拾遺和歌集卷之弟四

妹哥と

初秋の心をいふをいふにける

山崎

けしきもさしこそ我吹月乃もよわにきく娘の心

妹百者言今も 皇太后ま久丈後成女

娘の我身もいぢゆ成るものよとす秋のうら

歌一十

久納言行信

うらみの涙も有る衣袖乃中ひらけぬ娘のこころ

妹百者言今もいける内露

贈后三位為子

今もわづらひくもきし白衣も袖もさる娘のこころ

久保百者言今もいける時

民部卿為友

あしき人の心をたがはぬいひのこころも娘のこころ

久保百者言今もいける早秋の心をいふにける

藤原基隆

初秋の心をいふをいふにける

歌一十

山崎赤人

あけぬと乃娘のうらみもわづらひぬ娘のこころ

二星体状としくしを

後二条院御製

わが河をみくに天河船おほにまのわさ乃夕の鏡  
歌しし

銀河をさしきまのちの秋の波たこく

天河舟まつこくむほ乃ら言やゆ史のしげぬ

源兼氏納書

天河とみらの橋のまよわつしそせらるるこししうひは鏡

糸主補親

天河の鏡乃ちを我に映はさうつしはかこしし

百首言は

中宮人史師賢

七夕乃鏡の一夜の鏡しそけいしにうのなこせちを我

歌しし

院御製

織女つむぎのいそここ交あらうしわ我をしつ夕夜を映初言

六条院宣旨

わがみこも恨は後七夕のほれよこわら天のねこら

正安三年七月の裏に七夕七首言はけの村

正人納言為世

ほれよこもわすいそ成七夕の年月もこ玉のなよを舞

堀河院百首言はのり

祐子の親王家紀伊

七々乃逢まのちも、掃るゝも、引糸の長也との

歌一々也

源公忠納本

田我ものちも、すれど、天何かり、我て、さ、物、あ、ぬ、

田克成入石も、用白も、致大也

天何、あ、る、さ、す、ゆ、く、水、は、田、我、は、あ、ら、の、板、さ、く、あ、

平重四納本

天川、い、り、ら、水、乃、あ、り、我、さ、く、年、は、さ、さ、し、神、也、さ、

又、保、百、さ、奇、せ、け、り、付

前大納言實教

七々乃、公、社、あ、る、神、の、杖、凡、よ、う、つ、ら、い、け、り、の、つ、つ、我、を、あ、

竹、助、は、祝、日、家、又、十、首、三、の、よ

後西園寺入道前々致大

唐、衣、袖、も、草、葉、も、さ、り、ち、り、く、娘、凡、い、ち、あ、う、こ、り、

歌一々也

前大納言實教

娘、は、け、い、い、ら、ら、も、の、み、さ、る、さ、な、は、さ、り、佐、々、原、乃、上、凡

私、言、所、さ、く、六、首、三、を、け、り、は、娘、奇

後京極持収前々致大

英、京、つ、あ、ら、は、娘、凡、な、る、を、い、あ、く、無、玉、ち、あ、康、の、さ、山、

英、凡、を

前僧正慈勝

昔も〜〜の娘はの〜〜の娘は

又保百の言をけるは

忠房親王

娘凡の吹うえ〜〜の娘はの〜〜の娘は

高元百の言をけるは

昭慶門院一素

草も木も〜〜の娘はの〜〜の娘は

みかろの言をけるは

暁娥天皇の御

皆人の言をけるは

清姫一 平城天皇の御

〜〜の言をけるは

正治百の言をけるは

皇太后宮女史後成

〜〜の言をけるは

二保の言をけるは

後二素の御

白鳥乃を人の言をけるは

凡前草花の言をけるは

後西園寺入道前太政大臣

山本乃をるの尾花うらりいし我袖ゆくと圓く短凡  
周防贈をぬ人を家の前裁合よ

後人しし寸

ゆゆしきくまの我は花落しと吹凡よをいひてか

天曆卯は前裁合よ

藤原元真

年をへく笑叙よわと女席むくふを並こしむいゆを色

ふ里よあらししゆよまをわく女席むをみく

ふ光は

藤原元真

虎名くみらの里は女席花しゆめしとゆらるるふ

郁芳門院の前裁合よ女席む

女席

女席花しゆらにゆきく白ふ小草の枕とらとりわふ

又保百とる言をける時

前人細言経緯

家名しる世に草葉の秋凡よまうふ一箇く勢略しん

うら乃まのこころもこころにうらむいしは朝

草花

指中納言実仁

ましは笑白しし切家のゆきく庭の短とこのもか

康保三年八月十日東の裏前裁合よ



皇太后文檢女史物雅

いと咲花はみ我は白雲のまをこころいわらふと有小

歌一十寸

為道納下

うささふおにこもせし枝あのみくのまわぬ花は下房白

こまぢ大長 実

まろりる藤乃下葉の下まのま枝うまゆし花とそくそ年

正治百三のうまけり村

正三任季純

ま地野の小花をむくち水て又の下房のちり花あし

うら乃をのここもこころうにうらゆつりし納草

花を

民部マ為友

ゆりゆりの野への花藤ちねむし納草あきこすもわが

藤乃のれ中よ

素暹法師

あゆまをの小花はちねむしなまよこころ人の神いあつしと

前大長

あつ神もまろりうらゆらふ白雲のまをこころいわらふと有小

よまこ人し寸

うささふおにこもせし枝あのみくのまわぬ花は下房白

山階入道大長家此十背言は野草むら

いよししを

三條入道大長

かろく人乃神印く文才の蘇の錦がしういひは  
歌しし子 贈あ上人

ゆきむく切ゆきみれい蘇原麻の三野の錦るあき  
蘇原冬隆朝長

蘇の花にしういひく蘇凡のまうい言にそく  
皇嘉門院別書

とく野乃蘇の下葉のしういひく蘇の錦は  
蘇治百と音をけり麻

蘇とくいしういひく蘇の錦は  
花の流は人た

土御門右人長山家の音を合日麻

体後乳母

妻とく蘇乃くあやう鳴麻のいふ人のいふは

歌しし子

如新法師

小田はは乃いしういひく蘇の錦は  
又保百と音をけり付

指中納言権

枯らしう小野の草外あやうあきの蘇は麻は

あきとくいしういひく蘇の錦は

後宇多院北朝

煉布の野見をさきまきし一斗の草じり考す

歌一十

修理の更歌書

夕のくまに夜啼くは凡のいの野の麻の今てあくる

各所をまけるは

春議雅行

津國乃いづくの奥に煉布一麻の巻たさく杜の下に也

煉布中よ

前大僧正良信

杜をへくきつうふれあら春日野に我宿をきく掉麻の丁

元喜三年九月十日之尺後宇内院日之背守

海とくれたけり時月前麻

春官大夫云實賢

丁し月乃乳をいりそは又又の又下くれ麻の吟ん

指中納言云切

月乳は妻体へのく野とよまにの所を麻のあくる

建保二年の人の家百とすく谷麻

前中納言宣家

やふ麻の初ゆく谷乃玉かじりおとりをさす寸妻やあくる

煉布の中よ

平宗宣初巻

らわらまきさくさう掉麻の妻居りよの煉布のきり

前大納言考家

いゝ又られ思ははなすつら思事の時らこの掉麻のあ

可重の文女扇合。 後頼朝来

此らハ舟のよもむに麻の姿をりよわけたわりの  
歌

山里は秋を夕まぐさの妻居しりまら麻をそ麻

建保二年秋尋ちけり

後二位家隆

ゆるしにけり娘は長い一まの共る今やあいら

歌

あつらふいぬるをのそくわらふのそくわらふ

中納言家持

す乃とよるう鳴れる我富のわらわしよまの

前入納言為氏

妹難の花笑也しけりきくの衣わりのいほんか

為道朝女

何ゆへきじか我が妹凡そわらわしゆの鳴る

乃安百々言ちけり

二只は祝王竹助

妹凡そ東のよまの共はゆさすなまらうにけり

歌

納りよを鳴れけりけり初冬の月のをよ妹凡そ

船恒

秋はきよひかりを白き舟の中より成にす

平貞内朝也

夕陽くれりしきよきよのよきよきよの舟の物

橋中納言長古

拙人の道はしきよきよの松原よりすきよきよ

前左衛門也

この舟のしきよきよの舟のしきよきよの舟のしきよ

家よ又十首よみしきよきよの舟

入道二不は親と道助

橋姫乃妹の月かきよきよの舟のしきよ

守芝は親と家よ又十首よみしきよ

野宮丸人也

今より舟のしきよの舟のしきよの舟のしきよ

歌天門也

思ひしきよの舟のしきよの舟のしきよ

休見虎也也

又保百首よみしきよの舟のしきよ

又保百首よみしきよの舟

は下宮也



續後拾遺和歌集卷之弟又

妹下

元亨三年八月十又後半の月又<sup>十</sup>哥

なける時

民部<sup>三</sup>考<sup>後</sup>

久<sup>三</sup>乃<sup>中</sup>を<sup>わ</sup>に<sup>月</sup>の<sup>十</sup>又<sup>妹</sup>に<sup>照</sup>つ<sup>と</sup>思<sup>方</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>思

百<sup>三</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

信<sup>中</sup>納<sup>言</sup>と<sup>雄</sup>

月<sup>影</sup>乃<sup>く</sup>も<sup>し</sup>ぬ<sup>る</sup>ま<sup>し</sup>鏡<sup>い</sup>く<sup>女</sup>の<sup>娘</sup>を<sup>し</sup>て<sup>に</sup>い<sup>し</sup>

御<sup>歌</sup>

と<sup>島</sup>女<sup>ら</sup>の<sup>こ</sup>に<sup>か</sup>の<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>月<sup>の</sup>鏡<sup>こ</sup>の<sup>ほ</sup>る<sup>さ</sup>ら<sup>し</sup>

元亨三年八月十又<sup>妹</sup>又<sup>十</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>に

か<sup>く</sup>は

板<sup>守</sup>を<sup>院</sup>の<sup>歌</sup>

詠<sup>れ</sup>た<sup>く</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

百<sup>三</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

前<sup>人</sup>納<sup>言</sup>考<sup>世</sup>

い<sup>し</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

武<sup>部</sup>卿<sup>久</sup>明<sup>親</sup>と<sup>家</sup>を<sup>考</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

平<sup>科</sup>は

乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

又<sup>保</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

藤<sup>原</sup>行<sup>房</sup>納<sup>言</sup>

乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>乃<sup>中</sup>なり<sup>時</sup>

船中月をくめり 源家長朝を

ゆき方戸を吹つる月よこそ 我て好妻とぞすめり舟人  
又保百を寄なけりは

津も國冬

あしづい月すじいの浦凡にあまのうらめれ給ふまは  
江月を 入道親也尊同

ふまのうら江乃若のよももた月すじい我妹の浦波  
水と月をいづらそよとほりけり

鳥羽院也制家

やう浪乃志賀のうらめれ身晴く月すめりうらめれ當

月をうらめ 永福門院

更けに真乃乃尾のよももた月すじい我妹の浦波  
二條院に百を寄なけり舟人

刑部も範兼

秋がみのとしらののよももた月すじい我妹の浦波  
是眼行濟

あしづい吹けとけり月すじいの浦凡にあまのうらめれ給ふまは  
後徳大寺も人志

子殿河あまをみまのうらめれ月すじい我妹の浦波  
太宰大貳重家



氷乃面より飛る月をかくしんくもあらまこころは

道因法師

天川より流る月がらんやうも氷の下より有ける

中納言家成家の言合

藤原朝方

天け八十嵐のやみやわくしきくう寸めら娘のく月

娘等乃中

光明寺も入合お掛ぬ大夫

しらしら氷の白皮つるくわの思ふる月氣

塩の院の歌

そらそら月をかくしんくもあらまこころは

又保百の言合

後西園も入合お掛ぬ大夫

はちこのそら白雲吹はあやうく月の氣うは

の月と

律も園道

かたしら氷の白皮つるくわの思ふる月氣

後東基は

白雲乃をかくしんくもあらまこころは

後鳥羽院も入合お掛ぬ大夫

如新法師

そらそら月をかくしんくもあらまこころは

前大納言考世よりと依一春日社之十三年

藤原盛徳

同日乃野人の娘見ゆくらりよ衣のしし月をみる

月<sup>の</sup>うらぐ<sup>く</sup>流る 夏元宗考

くもりしと思ひて果無娘弟共くまをすめる月乳

建仁元年又十三年うせける所

後京極持政前をぬえ

とくしつよは依のく方月しん思ひて娘のえ

中務卿宗之祝と家言の合し

前赤藏徳清

老むけらるるいれ更ふに非し月みりよのそ秋年のを

弘安八年八月十日衣巻し流る二十首うせ

はあき見月こりよし

前大納言考氏

みれりしてふくこみと幸す娘の月くら衣のそ

歌しあす 祝部成茂

さしあきと控のししよわ娘の心月うとる

人丸

本乃りよりしりろの乳ゆとまをひらふよき更し

建仁元年八月十日衣巻し流る二十首うせ

曉月こいしを 人恋郷有家

花のこいしを飛ぶるみよりの梢よおにけり有切の月  
又保百をうけりこいし

古昔未替為定

きつりくすよ霞く娘の柳の下すくわねを鳴く  
藜端虫悲こいしを

伏見院中製

草乃系あはすく鳴く娘の恨るそこ飛ぶこいし

歌一十 後二位為理

あらしのまのの系鳴くの泪はあはす娘の夕に花

建保四年百をうけり

後久我を故人也

娘は枯ゆ虫の思ひくすくわねのしすいそく

歌一十 後二位家隆

同人しをうけりわねの娘の草又なるは

凡前接衣こいしを

藻野門院少将

あはすく娘の思ひくすくわねのしすいそく

高元百をうけり

法下定考

高嶽乃ちのへとさしこ夜凡と袖じこころと誰うつて来  
歌しこす  
為道初也

凡きみすうつこなるし長月のこころすうに衣うし  
建長六年冬つ後より又さう海きつれけり  
よ序すく何邊掛衣こころと後休けり

徳人ち入道前々教人也

世里は衣いのけ凡きけれよむとゆふこころとさしこ  
後一乗入道前用白た人を家より里掛衣こ  
しと後ろ  
源兼康初也

わすの凡袖ひよのまけれはまのの里とこころとさしこ

又保百首言をけり

前入納言後也

衣うしちね田の里よいふしちちあさじりなわ林のよ凡

歌しこ

今如何を味

くじれ乃をくこのふ田まらるるよりうろめむさ衣うしちち

弘長百首言をけり

前入納言為也

衣を乃ちちさし人のこころ後りよまきようの思ふまじ

うのまのこころ又昔言にちねにいつと一何連夜

掛衣也

源真行初也

里人乃社母人の教と白家の教とをいふゆへに衣のふ  
久世百の言をける付

花園左人長家小入進

~~~~~  
又保百の言をける付

前入納言実教

妹もよとまよふ更ら月影をともす思ふこころにこころ  
一ふけ親とまよふこの四季の屏凡

用白左政人長

更らるの袖もよまよふとく我乃白妙こころ月よういなり

西園寺入道前左政人長家共の隆親とく二千六百とく

淡休けり

前入納言為家

わが我又と我ゆへなるは妹のくをの月よう〜み〜衣う〜

歌〜〜

平時廣

衣うにまよふ〜おののまよふ〜愛とほとす月のみ

前僧正實休

妹もよ〜お〜六月の有明と〜つ〜に我あ〜うに衣小

後京極持政家三つ今と野凡

后二位家隆

〜と我い〜このまの〜真意有衣〜枯つ〜る娘凡〜く

歌一八

前人納言賢季

ゆきすまう〜夜ふす娘はよき家のよいらしむいしむと

贈長之尾為子

月あ〜うらら〜ま〜や〜思ふ言よりえの夜のよ〜ま

前人納言云

多〜よ〜羅のま〜い〜わ〜は〜ま〜う〜し〜の〜ま〜い〜か〜

謙信云

き〜ひ〜あ〜こ〜ま〜も〜有〜ふ〜草の花い〜り〜ら〜家のよ〜け〜ら〜

也花ははの草の草を〜貫〜

う〜ら〜ら〜み〜ら〜お〜〜草の花さ〜け〜ら〜枝〜か〜〜

坂上元則

つ〜ま〜い〜の〜日〜や〜々〜我乃〜ま〜ま〜我い〜わ〜す〜む〜の〜ま〜い〜ら〜ら

真子院おけけ〜ら〜は〜ら〜は〜ら〜秋〜ら〜ら〜

を〜歌〜り〜く〜よ〜み〜は〜け〜ら

娘乃〜ま〜い〜の〜程〜ふ〜〜し〜〜し〜を〜誰〜も〜さ〜〜い〜ら〜ら〜

秋花を〜よ〜し〜と〜は〜け〜ら

止割歌

今〜ら〜乃〜娘の〜ま〜い〜と〜い〜し〜を〜我〜ま〜野の〜花〜を〜娘〜ら〜ら〜

人丸

天〜花〜ア〜ら〜乃〜に〜この〜其〜い〜の〜い〜く〜も〜あ〜し〜の〜ま〜い〜

歌一し しみ人しす

乃金のまぢしめしらぶらつたのしるしはのしるしを  
よとすりしとねしけり

後宇多院日記

水鳥乃青野のしるしのうしくまををいふし

娘等乃中し

前信玄通牒

大々たす百大字

より乃ねしし思ふれしゆそのに娘のしみら

建保四年百のすけり

西園寺入道前左大臣

そにれし娘よししれ思しすけの初風のしるし

伏見院十肯等し書きしけり

前中納言為相

小倉山娘のしるしの初しれ今しるしあ

歌一し

後九条前大臣

しるしにしししししれはるあいにしけり

のんた

しるしにしるししししれしししし

寶治百のすけり

皇太后又人妻後成女

しるしにしるし田のしるし娘のしるし

百首言女一冊 中宮左大臣賢

白鳥と河原とくまよわくまうようせよふくたてての杜

歌一冊す 順徳院御製

紅葉すもまきのひらくみらこどく我をのくは枝のよん

権中納言云雄

移ゆく枝乃日子いれ我をののまよふれさまのぬきん

よみく

妹の袖乃こくく山の初春よはりぬ紅葉のちりまくとは

常盤井入道前を政人書

なをこよまうりこ思ふ我宿のきつこの庭余は枝凡うあく

衣笠前の人書

木くく乃之田のぬきん丸たまきういさうふ枝の何あこ

寶治百首言をけつは何紅葉

冷泉前を政人書

くく錦のいし何系は枝く我てよみらをわくささの思は

紅葉を白鳥皇后言前合よ

権中納言長家

人井河庵のきとく枝まきとみらのちらこをわはけは

権紅葉のいし書を 式部卿久明祝日

紅葉すもまきのひらくみらこどく我をのくは枝のよん



暮梅乃んそ

前人納言為家

こゆるさきさるるこころなきこころと天律をたふさ梅の別を

前人僧正頼朝

ふしうぢり日ふりしにさかむじゆいふとよめ梅の別を

那甚百もきまける日

人魁の隆情

身を乃りわく世神よまへんくわ子とさる梅のくれふ

家の多すまうよ

雅<sup>雅</sup>叨親と

羽ゆゑふはくしる乃神のよあこも

梅の多々のこころ

續後拾遺和歌集卷第六

冬之哥

歌不知

伏見院出御歌

娘凡の音母の里れもみらふは西をりうらまゝにさそをり

初冬の心を詠ふ

前赤坂雅有

移ゆくまゝもみぬこころにさそをりうらまゝにさそをり

後一入道前用白丸久末

草乃葉ももゑの花のまゝて外ふりてをわらひてをり

歌不知

前用白丸久末

久し乃月のかつらゝまゝにさそをりうらまゝにさそをり

又保白丸等もまける附

赤坂利花前用白丸久末

晴くたりゆまゝにさそをりうらまゝにさそをり

西宮初村にこころを

前中納言山家

清乃たももせりりきつと秋無月やうらまゝにさそをり

歌不知

赤坂雅行

やうらまゝにさそをりうらまゝにさそをり

前久末

白雲のうらまゝにさそをりうらまゝにさそをり

前中納言國信

後一人と云ふは其の父の末葉の一人は其の父を以て

業は此の如し

本格の業を以て其の父の如くは其の父の如くは

落葉を以て 法下隆則

の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

中納言家成家より言ふに其の父の如くは其の父の如くは

りて其の父の如くは 人官前を以て人吏

其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

伯子に親王家乃言ふに其の父の如くは其の父の如くは

よき人

青野の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

寶治元年十月人井付の如くは其の父の如くは其の父の如くは

業は此の如し

白河院の如し

人井付の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

業は此の如し

其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

後深草院の如し

その父の如くは其の父の如くは其の父の如くは其の父の如くは

律師永親

おまののまらうらふに神無月幸のわらうらまはり

有人をぬけけるは家は言合ふけけるは落葉

後は世も入るも圓白なぬえ

檀乃のほすまじしすも又葉枯す我思ふのほる人我

百の尋の中よ 式子の親よ

まじりくくにかりぬ核のやま又葉母のいばるる

元亨二年八月人賞もまより幸有る人

歌をうつくしく言じのほじりていばるる落葉

清をぬけける 後宇も院の歌

し里のまらまらうらまはり道はくまらぬ人のうらまはり

ゆま百番の言をよ 直娘門院丹後

し里の雪よわらうらまはりて又葉もまらぬ人

まの言の中よ 後三位行徳

奥の乃ま葉のよは降雪の消てあるまらぬ人

よかえ百の言をけける針葉

贈に三位為子

ふらうらまらうらまはり乃京のまらぬ我はあまらりて此のい

百の言をよ 二ふは秋と冬助

うらうらまらまらうらまはりてあまのいばるる下草

まらうらまら 道法法師

を乃にのぞきみし多とふりけりて其の下なる庭の白草  
延長十七年十月御前の事此宴の日

源公忠朝也

秋三月一々此の庭に花散果もこころみし事

寒草のこころみし事 平維貞

其枯の青にも多ふ事此の庭に花散果もこころみし事

平貞宣

平貞宣

その庭の庭に下なる事此の庭に花散果もこころみし事

其を

平貞宣

平貞宣

わさよの庭に下なる事此の庭に花散果もこころみし事

原寒草のこころみし事

藤原基成

冬枯ものこころみし事此の庭に花散果もこころみし事

邦有親と家の又なる事此の庭に花散果もこころみし事

権律師實性

その庭に下なる事此の庭に花散果もこころみし事

其を

藤原秀長

その庭に下なる事此の庭に花散果もこころみし事

後九条前の人

此伊國の庭に下なる事此の庭に花散果もこころみし事

平貞は初巻

かよふ入江の浪はたかして若の葉はしめしのつら  
二条院讃岐

かよふつげのわが葉はたかして若の葉はしめしのつら  
伏見院は製

かよふしつなつら若の葉はたかして若の葉はしめしのつら  
土御門院は製

かよふ江のわが葉はたかして若の葉はしめしのつら  
安治百三子なける江若人いふ

百人納言基良

かよふ江のわが葉はたかして若の葉はしめしのつら

百人納言は 用はなぬ人

かよふつわの葉はたかして若の葉はしめしのつら

寒若を 為通初巻

かよふ若乃の葉はたかして若の葉はしめしのつら

左京右大臣藤原家

百人納言成通

かよふつら若乃の葉はたかして若の葉はしめしのつら

河邊冬月

常盤井入道百人納言

十一年八月廿九日何のわらわら八月のあたらしくけさ

性助は親王家の又十三年三月

前入道言為氏

冬十一月廿一日何のわらわら十一月のあたらしくけさ

歌一

後二重院止書

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

豊明節入書とよ何とけさ

卯書

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

あきらむる言をけさ何のあきらむる

六条の人書

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

歌一

平政村初書

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

人丸

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

建長又年後夷城院と三首言海也よりけさ

はきあめり書

七卯門入道の人書

天何月廿一日何のわらわら十二月のあたらしくけさ

はきあめり書 ゆたよりけさ

小島

源朝國朝を

よ〜〜ははにははにははのさゆ小島わ〜〜ははにははにははに

深衣小島とよ〜〜とぬ〜〜けり

るふ流御製

波のまに中〜〜はは〜〜ぬ浦人のこ〜〜ははにははにははに

き乃言れ中よ

宰相典は

ちよらう〜浦よりをらの友小島〜〜に中よ〜〜ははにははに

上階入道左人老家〜〜河小島〜〜ははにははに

津も國助

お〜〜ははにははにははにははにははにははにははにははに

い〜〜ぬす

昭慶門院一条

〜〜ははにははにははにははにははにははにははにははに

流御製

友小島月よ〜〜ははにははにははにははにははにははに

よ又百番三の合よ

赤陽門院越前

有明乃月の〜〜ははにははにははにははにははにははに

い〜〜ぬす

後立法師

よるち〜〜ははにははにははにははにははにははにははに

大貳三佐

ち〜〜ははにははにははにははにははにははにははにははに



あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
あつたむしりくへんていふことありて七百三十一

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
家<sup>年</sup>運法師

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
建保又三年の裏又七言合よき何代

後二位家隆

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
三田河本紫の屋乃志しりて凡のけしるあちりきり

歌しりて

後京季<sup>重</sup>經

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
かりて何さむらわしりて更らよまの陰よあや先もり

源邦長初巻

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
奥のいりて清水をさきわ子娘のあちりきり

惠慶法師

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
水らよあしりしりていりていりていりていりていりて

渡邊あしりしりていりていりていりていりていりて

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
船出するさしりていりていりていりていりていりて

又保百らよのあしりていりていりていりていりて

後花園院内入長

あつたむしりくへんていふことありて七百三十一  
ふりていりていりていりていりていりていりて

后花園院内入長

見ざるにわづらのしほし人ときわらわし我のまことしきり

ちるの乃中よ 鎌倉老女也

ちるのいみじのわらしきして伊勢のしけいあふし

大江宗秀

こゆるよりねえのほくくあはてはをいでよちあふ

前中納言定家

ふしふちぬくまのそくくあふしきりあふ

野徑愛也 藤原為冬

ふゆをいれを藤のうへより袖よゆゆくあふ

歌しき 後鳥羽院止書

みりりすかたの方をのいしきして鳥さのまじりあふ

前納言為家くすくす

信實朝長

秋のいしきものよりあを枯くしじらのしきりあふ

光明寺も入道前持ぬ人た家三の合よ暮山書

源有家朝長

夕の秋をすしきのしき若のよは榎の尖さのしにけりあふ

弘長百々三のなけりあふ

衣笠前内人書

あふしきりあふしきりあふしきりあふしきりあふ

一尺の親とこの口の厚の屏風は

古無縁替為空

足引乃のいひこひのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひ

古人納言の世

外からわきこぼして換るは松のいひこひのいひこひのいひこひ

愛活白くそめと我けるいひこひのいひこひのいひこひ

後媛城院片敷

等よけらましのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひ

私方所めく釋阿よ九千領拾りよけり時屏

後鳥羽院文ゆ

任者乃松よ白ゆとちりしよまよりり也ち也ち也ち也ち也ち也ち也ち也ち也

後宇め院よなけりちのちのちの中よ

惟宗の老老

吹かふるしこいひのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひ

庚申の夜佛米樂の似り女房言の合へはける

孫 裕子に祝も家宣告

雪ふれぬる白くも雪も雪ついに我をこいひのいひこひのいひこひ

故いひこひのいひこひ

のいひこひのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひのいひこひ

用雪を

大江貞重

別ありてこの故に日殺之人に其の雪の~~~~川の原  
弘長三年の裏に百三言をけりは吾納

中人納言考成

初めさく人よりさくさくさくさくは孫中~~~~人其白雪

又保百三言をけりは

後中納言云宗母

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

を雪を

人に廣房

植乃乃よ西のさくさくの後~~~~をを難とにわら白雪

後中納言能信

雪に~~~~難とにわら白雪と~~~~人~~~~

雪に~~~~難とにわら白雪と~~~~人~~~~

中人納言能信

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

を雪を

中人納言能信

わ~~~~乃乃西のさくさくの後~~~~をを難とにわら白雪

中人納言能信

初々よ身よさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

を雪を

中人納言能信

にわら乃乃西のさくさくの後~~~~をを難とにわら白雪

月日又三年を言わ

續後拾遺和歌集卷第七

物名

玉のし

好忠

きのふゆきとまをりて浦を踏むついでのごくとおひよるホ

中納言兼輔

夕なれいあしうつるを考のりのこく言ねそ昔より花

梨の花はこころうらやまぬるをうつくしき

紫式部

花ごりいり花の白いあまをりあまのこころを

久安百首をうけける時彦柳橋

皇々后夫人史後成

むらさきのあまのゆめはゆめあまの宿よりさくら

柳

後頼朝

すま乃浦に渚うらやまを花松立に波のこゝろを

かきうら

藤原納言為氏

あらしあつむらさきと我のこころしき世は恨み

喜子流のまをる子日松

紀友則

つよをすま乃浦のしよと我のあまはけりあま

とくろ

正三后志家

ついでにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

ゆきしこの花 後頼朝也

朝のついでにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

久安百のころけしきり花の乱り

東は成卿也

うららかにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

きつらるを後ら 成中卿言也

月草乃をわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

おもしろよりとわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

奥にわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

よら雅多こころし

藤原相如

ついでにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

正治二年百のころけしきり花の乱り

白くはなをのぞきしにけしきり花の乱り

いかにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

さきしこの花 津守國助

都にわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

ついでにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

ふいにわがはなをのぞきしにけしきり花の乱り

わ刀の帯より親意は師

かづの思家のきりこころあきら野を引つとる魚袖まふらう

ころもろろ 後西園寺入念あなぬえを

妻らひとじりしころや掉廉の引つとる後の下にさす

いしりり

常よりおはるもまきりれまひりす入ぬらふは物やうらふ

ころすつら あふ 陸信朝を

しりりお思ひくはしりりしりりしりり物うらふえり

きりりりり 二条を自ら右后又入敷

秀の代よめ年をのころすころりりりりあわいの親らうら

とれり あふ 前左久を

ねのよ若しすころしりりしりり我もつあつとひりりり

ころろ 同光院入道前用白をぬえを

梅よりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

源氏の巻この名をりりりりりりりりりりりりりりりり

権中納言を権

井垣の花のきりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

おろりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

よみりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

石清水

用白をぬくを

我身のしらぬをくすむの事なきをばかしく思ふ

いと清き水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

私泉式部

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

あはれなる水は身をさらしてはぬがごとく清く洗はれけり

續後拾遺私歌集巻第八

離別歌

まをさるる身をわけては人よめどわかれの心はなを

左近将朝亮

別路のつらきほどに思ひわたるはわかれの心はなを

よき人よ

いふをばめづるはわかれの心はなを

今出河内守

うらやまなきほどに思ひわたるはわかれの心はなを

つらきほどに

信實朝亮



形をおもひにゆきとていふにきこむる事よかれば

よみ人志す

白妙乃神の別におけ我と思はるる我とて

堀河院百の言の月一

修理右大臣

の衣神の別のおもひと思はるる事よかれば

あにふくさつげんよあつさ申にけり

は平定考

ゆい衣の別のおもひと思はるる事よかれば

にけりふくさつげんよ

并乳母

おのれ余が我にともなひにゆきよかれば

私正の院甲斐  
三作志見

安高門院甲斐志見の所八月より申を

ふかけの志見

前大納言為氏

よりつち乃塩のほをりし人なつて事よかれば

わにまのゆかけの村人のつれおとけり

よみ人志す

おのれ思ひにゆきとていふにきこむる事よかれば

源道隆院前守より下ゆけり

能周法師

あつらひの別と世にさうくう人々は度(り)かける

歌一十寸

八重元六条

いづれに思ひにこそとまけれども別は限ちるを

人納言師氏

別ちらう限ちるのくれいもあはれうし袖のあ

きくはうら人よきぬじのりして

藤原元真

袖乃とよかにふりはなううけけ別ち道の草のゆかり

別を

前参議雅有

ゆかりのゆかりこそいふとく袖を思ひに

津守國助

都人ごゆらこそよはなをう草の枕を思ひに

其やのいさゆらうけけまをくけ

夏原相如

吹凡はしきくともいふかきふりよりふ家のまは

歌一十寸

人丸

胡ふくみすいふ草枕ゆかりくをうけつとるま

久世百を尋ねけり離別

皇太后官人夏原成

懐ききつと出に別ちをうけつとるまは渡るあま

志方の入らざる人の御もさへしめらる

貫く

ある所をきけし月をいそいで推しあう事ありき  
源順能登さるるくくくはけつはまをさる  
けつ 中務

いづくに依りしむらぶの雪海のわしを尋らるるや  
あへゆかはくは 康資之母

ゆくるくくは路の雪みくも花の都を思ひいそるし  
伊方の国に依けりし守の乃ふつにけりし後  
いづりしけり 能因法師

しとげし都をわたりしとて更へ海鳴鶴思をさる

別乃高こと後ら 常盤井入をぬる人老

相坂のゆふにを鳥もあまにをら地人のとくぬ別

平宗宣初を東へゆりしけり向まつりけり

檜中納言と雄

別くは又逢坂の用はかをいじりてさるる載るる

ぬり 平宗宣初を

用乃高をさるる海津代もさゆり又逢坂のねとやん我

東のつとくゆりけりし會坂の用をいゆえ

よめらる 民部卿成範

越後をいりてわける別ちをいれ遺坂の用いりて

歌一十  
前大納言考家

まゆりまゝくまの別は何なり名のもわら坂のま

わにゆりまゝけり人よまにりてまゝ

けり  
西園寺入道前左大臣

思ひ出さるるのいりてまゝ

かゝりてのまゝ

續後拾遺和歌集卷之第九

羈旅并

鳥の飛はよわりけりまゝのまのこゝ

まゝのちりてまゝのまゝのまゝ

りて  
前大納言考家

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝ

後宰の院考家

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

歌一十  
式子内親王

都中へ雪はふのたもかき草刈はふさぐのたも  
和思朋集とてふしを

皇太后上皇太后成

草枕ゆひのの種といふるし宿まをこしこ夏の花

歌ししす

惟明親王

草枕しすいふに夕より思ひそや我が末のしを

よき元百を寄をける付旅

前大納言後亮

有るふ夕ましく我が旅しすも<sup>神は</sup>あちらのなる乃こし

歌ししす

平舟は

ふゆをいふ成なるしゆひ衣しすも旅する野路のしを

前大納言実教

旅しすしすの尾花うらちの袖とては旅凡しく

院御製

都島ふちのしすのし人<sup>は</sup>旅しすも野山の春を又しす

正治二年百を寄をけるは野路

前大納言忠良

春しけこそるるよみたり旅し我ごと也しすも春の枝を

歌ししす

後鳥羽院御製

春しけこそ野鳩のしすの旅はし波こそわすれ袖も也

弘長百<sup>元年</sup>の奇なけりし様

後二位行家

草枕わきし様をかくれに都のまじり成にけりし

甲<sup>子</sup>の

右兵衛督基氏

鶴かぐこのの草枕く東のわきの子にけりし

道徳法師

かとうめ乃草の枕よしくおしやうを思入つて

様泊愛こたまを 尊政は祝し

しん流しわし破の松よけの枕の愛うし

前大納言兼世

母しり清乃おののちまはるしりおのしり

歌しおのす 恵助は親と

つら東はゆきしわし母のこしし思はのし

衣笠前の人夫

しりのまはつとむしりゆいゆいおのしり

都よりわにまのしり下して後前人信と慈鎮の

しりよみしりしりしりしりの中

前右大將頼朝

しり復れしりしりしりしりしりしりしり

しり元百の奇なけりし様

津も國を

ゆきちりくさくさく言はぬはむらさきも思入と結ん

久安百々言の羈核

徳賢門院堀河

けりくもを核のこ思入ににせり女官とてきけ

歌一々

平氏村

夕に我方のいの人女奴は司つて草の枕しすらし

よみ人一々

草枕巻乃おやよ入月おみづいふ人のぬきをわのれこみれ

雲法師

草枕わりのいさなよおしいる月と核のわをさうじ

住吉社の言をさうじくくよとゆけるは核宿は

西を

古卯門の人を

ゆふしる言にいさなぬえく草の枕よわくあし

歌一々

友原重貞

核のすらふく乃中ら切きいひあやうく草の

藤原保統

よとせし乃さる引くを末よきゆれわくさうじ中ら

高元百々言の核 万燈門院

白手し乃さるくおのりく都を思入のなう

歌一巻に

世良親と

ひまのいづくかおとし都へつにを客のよきも

様形を

た人を

ゆくまの里こそみね様衣立のついでに留まれば

平英は

岸坂のよそへ我の用もりのうゝ先也さへは宿のこは

正治百の言をけるは新様

小休後

今更とら宿りありのし康國のこころも人のいどむらり

甲一四を

康も國年

善也しく磯乃と宿り又宿るに海凡さへては島鳴や

殷富門地人捕す先はける百も尋申

前中納言山家

梅のすもる花はうゝ思すもの用りのふゆきの鳴れは

歌一巻に

前大僧正道玄

鳴乃衣るくうゝ様人よおしつるを我て息つ鳴る

私言所ありくくはる言をけるは様形

鴨長明

様衣ふじわのよの別よりと不我りそへは又野の春

東乃くくはちけるは岸坂の用もくはのい



きくはけれい

源親長執下

逢坂の用はれはきつりしあててさひいの朝りしを

後京極持収家十の清見用極を

は橋殿昭

身あて思ひに先にきみりいよす人けり用はれは

歌しりす

権律師雲禪

いふはれいしきあしきみりはのひりし用はれは

堀河院の百とす用

祐子御親の家紀傳

あて思より思ひしとて我みらのれはあてり我り白河の用

晋光園入道元用白家七々七々のうよみ

はけり用極

源兼氏朝下

限われは白河の用あててゆをいゆりる白極をり

極宿を

藤原基は

都思入極の用はれ用ちいひしあてのあてり

津も経國

思ひは思すをりしは思ひし乃衣て思ひしは思ひ

歌しり

前入納言為家

極しりしは思ひしは思ひしは思ひしは思ひし

ふけれはあてり

續後拾遺和歌集卷第十

賀哥

堀河院くらゝあまおぼしける射人のまのこゝ  
祝乃四をにうまにけりよよとけり

後頼朝也

少年こもち代をうしあ場入和遊のこゝまけれ  
祺子の親王家の言合よ同<sup>おな</sup>言を

よみ人

毛の世あまにせしめのちいひるにさるる  
祐子の親王家言合よ同言を

真研よりいひよふ我々の年一にさるるのま

歌

信公編也

わら人のちいお祈しちるあまの世代をいひ  
よこ言のうらとけり

後宇多院也

けいんまのいひくはまをいひあはるるかけ  
又保百の言をけり

はらとら也

うらふ今もるわらひてゆきまをいひけり  
弘安八年三月辰一辰貞子九十賀娘りとけり

後休けり

人登つ隆勝

に〜しとし十とこの考いあ〜の〜後休けりあるも世はあま

同十年正月内裏〜〜嘗て万考〜〜を海

と〜後休けり〜 同元徳入道前用白々致人長

考〜〜岩の〜出る嘗〜〜に代の考をい〜〜

卯枝を後休けり〜 法成入道前用白々致人長

秋代より年の〜〜き〜枝に〜〜えけ〜考の〜人

白河院あり〜子日〜休けり〜

宇治入道前用白々致人長

引や〜云〜み〜〜条〜り〜ま〜枝の〜と

永保四年の裏あり〜子日を

京極入道前用白々致人長

百あよ子日の松を〜〜〜考の〜年〜〜

中納言朝忠

ふ日〜の〜おし〜我旨の松〜の年の考〜わ〜

建治四年飛山院よ春松致の年〜〜

を海〜〜休けり〜 前久納言考人

〜〜印〜の年を〜〜考の松〜

式部つ久明親王家あり梅也久考〜〜

平貞保朝長

ふすり乃よ年の考を志す世よかうてふ（宿の梅り多）

後二季流位よおゆりくけは梅花盛久こりま

を海きし我けりま 前用白た久き

うひらうて日教うこめら梅のむりひりううはよちりけり

天曆所は花宮三ツ 謙地云

志しよう人けりくもは梅むのしけりこりまの考を志す

志しよ 後三流位宗

花をみり入りよのよら人かよの考を志す（世一）

正徳二年三月鳥羽友小朝親の幸の所花流

考を志す（世一）を海きし我けりま

一季り久き

花乃多を考のえこ思ひくやう人の初幸のころかき

寛治八年八月十又夜鳥羽殿より親地上月こい

つらんを 久納言云実

よしよよさるゝ此のゆふにけりてうすむ娘の月を

建保六年八月中殿より地月光明よりしを

海きし我けりま久き

正三流位宗

此水乃の世をあらうよゆり我のし末をく月のすむ

建仁元年八月十又夜和寺所の撰言合よ月多

妹友

後京極持収前々後人夫

月引くて流るる志しん君。代は妹のこゝろいのかくめくつら

文治六年女卿入の屏凡々

前中納言宮家

君の世を八の世にけりらるるよめを鳩の取向くおまうやあ

宇治入道前用白家言合は池水を

信中納言宮頼

年をへくとすしへて君の宿おれ池の水を小くうとつる

長保五年は成ち入道前持収をぬ人夫家の尋

よ水邊松とつりしを

大には言

君のく乃めりしとてお松けりしあそいつ水の守まは

正子の祝と家と繪合しはけりしとつる

よとそはかろる尋 相摸

万代乃けをちしへてけりしすむあそいの浦に松りまきま

仁和卿は入常會悠紀方伊勢國凡俗言

大伴墨之

伊との海の諸をきしとては流のよ年のあそを君のやま

長和元年入常會之尋方伊樂言も村山

源兼澄

毛の脚代も村山のうらまを八十うらまのうらまを

又保二年久常會惣北方辰日の樂破進江

國益原マ 元大納言後克

毛の世いふ年又百年うらまをいふうらま

益原まら里

分三  
之の才八面印六の他字再換付信  
正保三五六一換付  
慶安四年卯月十一日換付

續後拾遺和歌集卷第十一

恋一首一

歌不念

花山院御製

しうとせいのれねま〜〜〜いさするさめ〜

檜中納言敦忠

よの思ふあ〜〜い糸よあ〜〜  
のれまに乱る〜い志よう有ける

よみ人〜お守

道のへた尾花の〜の思草今更なるあめりおとら

旧地抄ぬ家百〜一首一思忠

二所中納言定家

うへ廣らうらうらみかみおのふ藤原ま<sup>まね</sup>ね<sup>ね</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

歌一十

坂上島女

夏乃野のけとよこけら娘ゆりのまねね<sup>ね</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

讀人一十

真とよらまの藤原下まのまをま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

志乃奇の中

八重統ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

式部マ久明親

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

平貞文家のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

躬恒

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

歌一十

志事

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

源重く女

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

今出河内道保

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

文保二年七月白河殿七百三十一宮<sup>永</sup>燈志

前大納言為家

ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>のま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

志のすけ申す 昭慶門院一暎

我思ひしむるもむじ名のあけけたるの燈よぬくくす

前中納言資名

後守るにワトタの夕燈いりけりてしよはる人

建長三年九月十三日<sup>十音</sup>末<sup>音</sup>の合よる燈也

前右衛門尉

川守くこあまらすくも火<sup>の</sup>わらさき後無燈の下にも

歌 一 寸 是 宗 回

去るれしきん乃うらた思ふ草門の方<sup>2</sup>はれ思ひわつて

親三息法師

去るれれちりて入江のみこまりはれんくまとの下せし

中納言入道右大臣中納言は家よる合よる

けり 九京も吏孫補

去るれれ思ひけりけりち白髪のはちり思ふ心わつて

入道前右大臣家よるくく思ふこころりて

後保けりよる常一也

是 宗 長 宗

よき思ひて夏のいりすし是はのたてしよ人よる

甲 ありて 頃阿法師

叔母のむじりたのむすをいよりては成れ



念方忠意こりしをいふ

藤原宗泰

子や魚々よく我の地は休しきもいそむるは  
言泪忠意をいふはけり

為道納忠

わらわのいふはしるし涙何れもいふは  
歌し子 権中納言實忠

さうかく袖のいふはしるし何れが  
中宮

きしるし袖のいふはしるし何れが

いふはしるし何れが

後宰相院忠義

世にいふはしるし何れが  
忠意の心を 中務少丞親王

さうかく我のいふはしるし何れが  
いふはしるし何れが

は下守忠義

くらや下守忠義のいふはしるし何れが  
歌し子 人丸

さうかく我のいふはしるし何れが

いっちりむける針にッ人よぬりをして

園融花柳歌

いっちりむける針にッ人よぬりをして

又ほ白の糸をける何

後花柳歌

思ひぬれりもいっちり又いっちり思ひぬれりもいっちり

白の糸をける何

入道花柳歌

力引にいよきしわい思袖の泪ゆへ人の名をふせり

思枕をよめる

律也園助

あ妙のほくらりわきりいっちり思袖の泪ゆへ人の名をふせり

高元百三三

花人納言為世

あつちりいっちり思袖の泪ゆへ人の名をふせり

用白をぬる人

思ひぬれりもいっちり又いっちり思ひぬれりもいっちり

天曆の所門よめる何

女御殿子女

思ひぬれりもいっちり又いっちり思ひぬれりもいっちり

思ひぬれりもいっちり

平河村納言

思ひぬれりもいっちり又いっちり思ひぬれりもいっちり

弘長三年の裏百とすけりける高杜志

前人納言為氏

ちりりしあひのまら下紅糸思ひついでいふまのいこも

志乃言うくくよとけりけり

後鳥羽院止教

望くつ乃日乳のかじりあよけし人の多を誰をを帰

山寄糸意こりよと

後一条入道前用白丸人志

あふ我らるるこ物成何け女のい達の糸女よいりけり

女まつりけり 九条右人志

人しれす思ひうせり紅乃まよ思へくもとりあるかふ

後宇多院十三年母なけり高志

藤原為親切志

紅のまよめしん考るよ思れり神といひいれりしと

建保四年百と母なけり高

常盤井入道前を致人志

紅乃あここの野およそく春のまよめくともこ思神小

影意をよととけりけり

御書

いけ乃まよとつらふのまよつらふとらふりしとけり

又保百の母をける所

前入納言経继

人一我寸思ひのうらまへはのちよき一思ひのうらまへ

慈母の中より 贈后三位孝子

よ一野付らうとく後のいりしなまを名もたはる家

大に改國女

志とけしこ名をなす子休とに神よもまう思国をりき

後子の親王

是は何人のあつた後を思ふつこ名をなす子休のち

后三位親教

あつちりうに名りりりのすまよか成しこまのよきと信を

建智門院

いしおれあつての浦に焼くかの焼着のちこにせれる

左京右美殿補家のちかよ

后三位頼政

あつて今いあつてのくれあつてゆら焼くちりよけるれ

歌一子 丹波忠孝納言

蚊つと火のちつとをみくと思ひし我まうふ志のちよき

正治百の母をける所

源師克

いぢりていへりしつらきしむらじきいし思ひの方へおのり

歌一十 伊勢

まじりていへりしつらきしむらじきいし思ひの方へおのり

左馬門督云春

まじりていへりしつらきしむらじきいし思ひの方へおのり

徳壁門院女侍

まじりていへりしつらきしむらじきいし思ひの方へおのり

平春村納衣

まじりていへりしつらきしむらじきいし思ひの方へおのり

後西園寺入道前左衛門大夫

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

西園寺入道前左衛門大夫

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

よみ人

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

宣達殿女御のち方へおのりし思ひの方へおのり

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

藤原實方納衣

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

いづれも人かたわらふ神の春をこそ祈はるる意しするは

くちけりまうくつりけり

伊勢大補

かゝる人々いふ所のをうらむもいふ所の人々  
まじりていふにけりけり女のくせはかたやい  
ふれがうけり 兵部元良親し

けりけりあゝ世をまじりていふはうらむにけり

くちけり

新院大補

いふ所のくちけり月日まじりていふ新りけりまじりていふ

中納言家持

春日のくちけりまじりていふ所のくちけりまじりていふ

道に更衣とけりといふ

光孝天皇大補

あさひのくちけりまじりていふ所のくちけりまじりていふ

くちけり

中納言兼補

是川のくちけりまじりていふ所のくちけりまじりていふ

中納言家成お乃言合に

よみ人

逢ふにけりまじりていふ所のくちけりまじりていふ

病治百の言をけりまじりていふ

前大納言為家

伊豆乃海のわまよし〜

歌〜

古所門地止歌

いと鳴みらめよ〜

二品は杖と足助

あまのよ〜

順徳地止歌

み〜

よみ〜

給わら仲乃わ〜

弘長元年百〜

常磐井入道前左大臣

尋〜

歌〜

後鳥羽地止歌

つ〜

光明寺も入道前持政家

歌

河内持政左大臣

年〜

寂治百〜

花山院日記

思〜

く——子 紀後文

子子子……思みたりとまのけはり水のち……思ひつわらふふは  
式靴門池古庫

思何わふと志也水のわいの信くつとてい……思のふ

<sup>元来</sup> 学子に祝日

<sup>元来</sup> け……つ……福……思何……つ……志也水のわいの信くつとてい……思のふ

辰三信氏文

各より何わふとよ……し流木の……つ……つ……思のふ

<sup>元来</sup> 志也水のわいの信くつとてい……思のふ  
<sup>元来</sup> 後頼朝を

……思のふ……つ……つ……思のふ

志也水のわいの信くつとてい……思のふ  
伏見院古製

……思のふ……つ……つ……思のふ

……思のふ……つ……つ……思のふ  
身々后官々又後成女

……思のふ……つ……つ……思のふ

……思のふ……つ……つ……思のふ  
八條入道前々又大者右兵衛督……思のふ

……思のふ……つ……つ……思のふ  
合……思のふ

九京古美形補

我意……思のふ……つ……つ……思のふ

……思のふ……つ……つ……思のふ



續後拾遺和歌集卷第十二

恋二

恋一十寸

よき人一十寸

わらわらうのそまういりうううの恋をいふ今もうす

人九

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

其高門地甲斐

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

恋のあや

辰三尾形

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

よみ人一十寸

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

其高門地甲斐

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

貫一

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

後二条院所書

いさうそよ思ひにうらまの恋れきうううれいふ恋こと

文保百三言一付

其高門地甲斐

なつこくをきてし物成思ふやあつこくをきてし  
志<sup>の</sup>尋乃中よ  
は眼行所

かこく入てしこくはこく今入しそその物にけり  
中長裕也

かこく入てしこくはこく今入しそその物にけり  
惟宗光吉

月母を成ふしる今入しそその物にけり  
藤原行清朝也

逢しよ今入しそその物にけり  
山内百三朝也

に和ふ二ふは親とさそ

あつこくをきてし物成思ふやあつこくをきてし  
志<sup>の</sup>尋乃中よ  
は眼行所

かこく入てしこくはこく今入しそその物にけり  
中長裕也

かこく入てしこくはこく今入しそその物にけり  
惟宗光吉

月母を成ふしる今入しそその物にけり  
藤原行清朝也

逢しよ今入しそその物にけり  
山内百三朝也

六条右人長頭中納言依けるは言合ふ依けるは

後人しるす

いづれのもの思ふしにけり我もさるるを志しけり

由 幸治つとてちりけり人よ申つるにけり

長尾長能

よ乃に秘の物思ふ人の袂もわらうと思ふに申すにけり

長久二年弘願夏女らの言合ふ志

赤松御門

看るにみらるる思ふ人あふる床あり又は秘し我言はけり

志の言申す

和泉式部

看るにみらるる言合ふ秘の思ふに申すにけり

藤原為徳納言

よまくと皆こみくすいり秘結つて愛はけり

伏見院止観

遣はしとまらぬ秘の思ふに申すにけり

入道前左大臣

いふ秘の結々言に秘合つて愛はけり

歌しるす

前信正實伴

ちけり院司つとわらふもの言合ふに秘結つて愛はけり

又保古言合はけり 津守團兵衛

歎けしあつたに通ふ事流木を思ひのちるるに

実の愛をさすを 大江忠成朝臣女

娘のうらまをいしち中くよさしと悲しうつちを

賀茂経久

面影のゆかにいをくつをさるるのふれを

人の洋よりけり 藤永範永朝臣

昔よりとて後とわ方をたしはしるる人よるるに

今更に我をくもはるるをいしをいさしけり

人の人<sup>は本</sup>アとしよ 小野小町

今更にかしむわ物をいよるるがこそ人よに我をい

天曆丸は言合よ 源順

ゆつとやんをさるるを思へく我を我すもわし成り

弘長百を言なける時

藤原義経

月く遠く思ふくのちるる人よ我を思ふるを

弘長百を言なけるは不遣意

藤原信言為家

誰ゆへと思ふこつしちを思ひのよるるに思ひを

弘長百を言なける 平貞俊

あつたを思ひけりけりけりけりけりけりけりけり

江戸定巻

西暦一七九〇年の今元禄年月一ウツチウツチウツチウツチ  
又元禄八年七月十日何殿ありて人々歌をこころし  
可しうほりつけにわくは又逢意

後漢陽片断

洞のこもり用しの板をうへわら思月をこころし  
後半女陣は十と音あり何言用意

右無傍書巻定

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
月一はよきと持けり

伏見陣片断

逢坂のあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
百と音ありは 橋中納言云雄

よそあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

歌一は 朝恒

音あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
正治百と音ありは

皇太后文書後成

恨く何れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

歌一は 祝部成賢

いづくもいそふけ我れいづくの浦れあひのよきなり

は下禪隆

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

源邦長初巻

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

各所百三言をけしは

信行書

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

いづくの浦れ

あひは師

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

百三言をけしは

入道前々致大巻

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

安治百三言をけしは言を凌志

後二信行家

年月いそふけあひの浦れあひのよきなり

いづくの浦れ

陸止書

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

百三言をけしは

前用白丸大巻

いづくもいそふけあひの浦れあひのよきなり

歌一十

後鳥羽院御製

建しつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色  
有進馬場よんくはひくりにしむらさき色にけしき  
りかひけるはすなはてけしきしむらさき色

巻後

あまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

よ又百番三の巻よ 醍醐入道前左大臣

あつらひくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

又保百三の巻よ

前左大臣

に我もあまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

少後利化院前左大臣

よあまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

志のつら 衣笠前左大臣

いとまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

前左大臣

我もあまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

九条前左大臣

前左大臣

あまのつらしきしむらさき色にけしきしむらさき色

し

九條右大臣

世に傳へしはまはるみくろ乃みくれてかろくす我も後等

愛治百三歌りけしにがくよ春草恋

後醍醐院御製

志傳くも成うと草に思へしは福の母す枯れぬる我も是

高木恋を

前入納言経長女

こよりにまけし思乃もくひるよこの枯れ枝の夕に花

花性も入道前用白家言合よ

徳賢門院堀河

に我もしどかにいんをみよ木のこつとすよのるにるよ

志高のうら

中務の宗尊親

は乃うに思うと松の葉うめうに我もよ志のつこるわを我

前参議雅有

はみくいのとこ子磯の名の松也我も年ゆる袖のつれをこ

後平清補納下

志のちもつこなるよの奥まうまくもつこめい志はやけと

前入納言為家

思へ入道はつすく同くしわふよこいふらししけやま

文保百三言をまけるは

前入納言空之房



年月いふのまゝのまゝの板の門にいつておしきるしきるし

中将はあけは家よりあけは

中院入道右大夫

逢ふこゝのうりしとのまはれん入下のことおしきり那

鳥羽よりくくくううとあけはのまを

権中納言俊也

慈徳くわすしおれはわら雪のあけはあけはあけは

あけはあけはあけはあけは

うらまにあけはあけはあけはあけはあけはあけは

後堀家代にとりあけはあけはあけは

後原草花女おけは

つとあけはあけはあけはあけはあけはあけは

あけはあけはあけはあけはあけはあけは

にあけはあけはあけはあけはあけはあけはあけは

祈不違あけはあけはあけは

贈辰三治わか

あけはあけはあけはあけはあけはあけはあけは

午親信女妹

あけはあけはあけはあけはあけはあけはあけは

邦有祝日家又十とあけはあけはあけは

祝部以親

おれまゝのあゝの逢よのりまも人の安一月日なりぬを

おれまゝ

平宗宣納を

つゝおれまゝの逢よを頼めりつり男ふ心やちまゝなりぬを

物秀房

言乃くふらぬくもたれうぬの向らぬらぬまゝなりぬを

持律師洋弁

たれまゝなり言の集るくもたれぬぬのじりりいれちまゝなりぬを

大納言親房

りまのちまゝなりぬをたれぬ言なりぬまゝなりぬを

又保百言をけらぬ

後二位宣子

おれまゝのまゝなりぬをけらぬ言のまゝなりぬのあゝなりぬを

十言なりけらぬにわらぬ言のまゝなりぬを

けら

後守めりなりぬ

もつれまゝなりぬ言のまゝなりぬをけらぬ言のまゝなりぬを

各所意なりぬを

後二位親家

もつれまゝなりぬ言のまゝなりぬをけらぬ言のまゝなりぬを

おれまゝ

贈後三位孝子

もつれまゝなりぬ言のまゝなりぬをけらぬ言のまゝなりぬを

三石は祝と是助

三石はあつちぢわよの歎しを枕におんけしついで

けれ

續後拾遺和歌集巻第十

恋争之

女の<sup>キ</sup>心こころをさすはけなけりて物候しんすし

と有やして

平兼盛

言乃笑をむらさか物し思いと行ふ人のにけりてあ

業平朝なき是國りつまの郡みよ吉母の里に

所はは休ける女よりいひけるを其女の父にわ

人よとては我に母をしょうよ志の人よとて思ひ

よみくつらりぬるよと人よとす

みよのこゝの心をよみくつらりぬるよと人よとす

ゆり

在東業平納本

つるまよしりし鳴るうまのののめのかのちをいりつとせ

歌一十

人丸

是引のふとくくくをあをきくつつにををぬれつうじ

よとく

夕く我乃うらのをちを思ひそつ方かりしよけ志氣我れ

基後

ちふつまのなみちと板よむ板の言りつうけとて

順徳中製

わすれ又田一々のをててうさよとくちちちちち

又保百の言せしこと

右兵衛督為定

か成るよよのえをけさる言のくるくははまて

恋乃言の中

平花貞

今より思ひ後をいりりちを待るしあゆみ

雁鳥司院師

待人のこゝろはねくの月乳いゆしわくかきく我を

光明寺も入道前橋政長谷寺にまうて二十

三昔尋よみゆけは恋恋

前大納言資季

いづれか月の光より更なる月の光  
江戸頼重

いづれか月の光より更なる月の光  
弘安百三平をける所

式靴門は片側

縁でみればちよとくもあまの月

いづれか月の光より更なる月の光  
平氏村

いづれか月の光より更なる月の光

前中納言公頼

いづれか月の光より更なる月の光

いづれか月の光より更なる月の光

いづれか月の光より更なる月の光

いづれか月の光より更なる月の光  
用白をぬえき

いづれか月の光より更なる月の光

いづれか月の光より更なる月の光  
まゝ尚志こゝろま

前中納言公頼

いづれか月の光より更なる月の光

いづれか月の光より更なる月の光  
申替つて宗意祝に家尊合ふ

前左兵衛持教守

いづれか月の光より更なる月の光

後宇由流よ十首言をける所意<sup>所</sup>也

梶中納言と雄

いよと中なる可のともあはけくさういし袖は我らる  
川くをける十の舞は形違也

夏原為明納言

かつ我て今うまきうう人あくのいよと井のあはけと  
いつこ思ひける人よ卯月乃みわ我の日とつたあ  
之く

藤原清正

よ早もち秋よのうらうらわい草葉に書かふうらうら  
如く

讀人

皆人のちんくまをい養草にけ我さう我の志うこもらん

歌

女信仲丸

秋の野は尾花うまをうらうらとあつとふるくわら志は  
常盤井入道前々故人也

落原と新多栂のくに尾むいりしゆくわ我は笑え

建保の裏尋合よ言善也

梶中納言の家

ゆふちるる力成けくくさういうさききさ若のてんけ

志乃奇の中よ 為道納言女

夏くくさういひう雅はなる若のちわ杯のてんけ

前人納言の家

現にありし忠一のいふに、みづき落すゝむらこしむら

又保百の言りけしにわづら

後宇多院御製

あふららまをさうつといたりて文にを鳥の言よりし

鳥乃の言りてとけしけし

院御製

かにし鳥よりし別の言の方のこゝろをさし成恨ん

為道初巻

うしくも鳥の言りけしにわづら

うらそのいふとけしけし

は別言を

権中納言云宗

よりあに文にを鳥の言りてわづら人の言りけし

月一を

前信公通性

月一と鳥の言りてわづら別の言りけし

平維貞

鳥の言りてわづら別の言りけし

鳥の言りてわづら別の言りけし

民部卿為後

鳥の言りてわづら別の言りけし

兵部マ元良親日家の言合

よき人

濃河をけりてゆゑわ徳のつゝ我におのゝこぬまうする

志三郎の中一 警司佐按察

鳴りしわくも思ふは使のふたつこよふり別する也

午春<sup>春</sup>同

に我をさすうゝ一極わくはわのわ別と思ひさるを

前名大末

わのまはゆゑおまをさしてゆるこの志久のふたつ月たうが

達智門院

ちりや又にいじこもも家のあこして別を袖よきてあに

本院休後よ物やて後といつらける

忠義云

房をさすわの思あうつよ別を我衣ようかいつさる

本院休後

衣て乃思つて固よといも〜〜別を交のよううわける

百も言やけにわ〜

片断

月やも影つら〜思白妙の袖のつゝ我の有あきをえ

弘安百も言やけにわ〜



鳥山院抄巻

めくつとわつこの雫といふも我よに我をこ有わをの月  
歌しりす

後京雅納朝を

いとまを我を恨の別しつとゆめくつとわい命をすすを  
中宮

又いにまをいもとる命りして其に別じつをいふの  
河内抄及家百と等し中よ後納意

藤原門院但馬

おまがわくつとつとつと枝のまをこつと思はしやけつと  
はるしやを  
は眼の流

うらゆめ今朝のつと我の面影もよう人ふつと枝まをいふ

鳥雲意こいふしを

後京雅有納を

明らこら雲手よめ外引よこせれ立別くつ袖いしと等

歌しりす

藤原元真

今うらら馴ての後つと衣袖のまをこのつとけまを  
女御藏子女とせつとつとつとつとけ我はけ

つとけ

天曆御製

あまをわつとほまをふれわあまを交いよゆくと袖のまを

意等の中よ

后京雅雅有

遠く方々への家の我々へ向きし人共を力回し  
二品は祝王慈道

逢きしそまをふりしと志すの後に別中なる我  
素性法師

いりちう舟の繩つなのゆるい命のつらう後しと思ふ  
よき人しと

みまうこよおるまのせし世にうらうらと  
人丸

なごう乃板田のうのいれなげとらとわこ  
山追赤人

春も乃乃留すなりあつし我らうらわつと  
源宗干初巻

よそうくと思ふにうらわしあひみ思は  
栞意のんを 後原冬隆初巻

そ乃にうらうらよりちをねんうらうら  
實治百とよまげのほ言馬意

みらうくのあうらのほりまにわあわぬ  
後深草院并心伝  
土山門院小宰相

ぬつふよくしと榊ちぬのけしとわらうら  
い

建保二年の久き家の百三言は各所悉

源有長納を

持弓のこのいじくおとくよくらくおじまをうけ

家よ又すこ言よとゆける

入道二親王性助

徳いそくおくらすいおくら幸の又めくつわ書くは臣

達後忠意を

源邦長納を

かつれて乃くこ名もくすお草くお徳い水いさこくわ

天曆少時の内屏凡よ

源信明納を

むのりこにみく人の四くあさこのはよちろうつひ

又保百を言なける耐

志後利花院前用白の太

契乃とあさこのいしに汝のいやゆいそ人うけ

取しす

平師親

うふんそよあさこよしらはのまつれや限をりまじ

くさひける男の外へるりしてそんかぬ

今下もきこいせくつげぬ

馬の体

きく乃あふりあはあそとあさ徳の命をそと

歌一十

祝部成久

ワヨリル又いしつゝさよふつこもあひしつゝの世つゞく  
廉義云の家の言をよき人しつ

逢うをさつてくつゝ思ひしはあはれしつゝ也なり  
逢後歌志こりしつ

檀中納言云の宗母

あうこよ思ひつゝ先忠逢しつゝはつゝはつゝ後つゞ  
宗母を志を克後納言

ねも又いしつゝのあはれつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ  
歎後志こを志を謙也園道

ワツ中いしつゝの思ひつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ

西日糸奇言りつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ  
檀中納言敷也

志我しつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ  
歌しつゝはつゝ中務つゝ宗志祝し

むすつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ  
後志志兼

あまを母しつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ  
前大納言實敷

移り人のあつら乃花かじりなつゝはつゝはつゝはつゝはつゝ

後二条院日記

いとまじつ〜この花〜と先〜ふ人〜い〜ち〜を

伏見院日記

わ〜の〜に〜ふ〜月〜人〜の〜也〜

弘安百々を寄る所

大藏隆博

な〜る〜と〜わ〜と〜移〜は〜

光明寺より入道前持家と云々

を

後鳥羽院下野

と何〜の〜は〜花田の〜の〜と〜

物乃〜ま〜いける女の〜は成りてつ。

りける

無部元良親と

今〜や〜い〜は〜の〜と〜の〜村〜と〜

歌〜子

相摸

い〜ま〜乃〜我〜の〜松〜と〜を〜と〜

鎌倉右大臣

い〜ま〜今〜と〜と〜の〜と〜

浪よくら思おしを

續後拾遺和歌集卷第十四

志守一曰

歌一子

躬恒

わひみくの後うら<sup>哀</sup>しみは<sup>ま</sup>つ江のうら<sup>ま</sup>しみ<sup>ま</sup>わつと<sup>う</sup>ん

堀河地よ百も<sup>う</sup>ちけらば<sup>逢</sup>不<sup>會</sup>也

祐子の親王家紀傳

のそら<sup>ふ</sup>乃<sup>ふ</sup>の<sup>ま</sup>い<sup>く</sup>人<sup>よ</sup>わ<sup>い</sup>い<sup>ま</sup>有<sup>ま</sup>わ<sup>す</sup>ま<sup>あ</sup>ら<sup>す</sup>也<sup>い</sup>は

典体周香詞巻五のりけ

追贈若人巻

中島乃わやのま<sup>り</sup>お<sup>り</sup>し<sup>す</sup>人<sup>を</sup>わ<sup>い</sup>い<sup>ま</sup>我<sup>の</sup>人<sup>也</sup>我<sup>を</sup>

女冠人二条殿を<sup>わ</sup>ね<sup>れ</sup>我<sup>も</sup>わ<sup>い</sup>海<sup>の</sup>濱<sup>の</sup>島<sup>あ</sup>し<sup>こ</sup>

り<sup>あ</sup>く<sup>し</sup>お<sup>ん</sup>か<sup>い</sup>ゆる<sup>り</sup>し<sup>書</sup>く<sup>は</sup>硯<sup>よ</sup>入<sup>て</sup>休<sup>け</sup>り

を<sup>脚</sup>ら<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>好<sup>ま</sup>す<sup>こ</sup>

也喜止書

濱の島あしこ<sup>く</sup>ま<sup>し</sup>う<sup>ら</sup>み<sup>れ</sup>つ<sup>る</sup>に<sup>き</sup>つ<sup>て</sup>ん<sup>き</sup>る<sup>こ</sup>も<sup>な</sup>い

歌一子<sup>為</sup>道納巻

い<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>島<sup>の</sup>あ<sup>し</sup>こ<sup>の</sup>ま<sup>い</sup>り<sup>と</sup>違<sup>へ</sup>て<sup>後</sup>也<sup>別</sup>る<sup>も</sup>也

道法法師

ま<sup>い</sup>り<sup>と</sup>違<sup>へ</sup>て<sup>同</sup>一<sup>島</sup>の<sup>あ</sup>し<sup>こ</sup>の<sup>ま</sup>い<sup>り</sup>は<sup>る</sup>ま<sup>も</sup>こ<sup>も</sup>也<sup>な</sup>り

夏原秀仍

鳥乃打よちうらまうし一雫の別のまじにうまぬうらま  
百首尋しむし一何 中官人夫師賢

いふうらま月日そこゆらまのひらうりか一ゆのわん板のま  
前入納言考世

まゆり又けれあてわん板にうらまぬ用務をわらま  
違不書<sup>道</sup>を 前入信を実起

神也我一用の清水の面影もまうらま我也わん板のま  
よまへし

相板乃用務をいふうらまうらまうらまうらま  
平宣は頼り

なまゆりまきうらまのまうらまうらまうらま

後京泰宗

かうらま神もあつれ月をうらまうらまうらま

又保百首尋しむし一何

後西園寺入道前々後人志

わらうらま神のつら我のなまうらまうらまうらま

歌 一 平貞宗

まうらままうらま一人の面影をかま月よおまい

百首尋の中一 式子に祝

終ていつにかうらまうらまうらまうらまの有わまの月

志のの中よ 今出河内と云

是は後世の世をくくをのめを志と云ふ人の世やこえ

史百番の志 二巻成撰交

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

志の志 兼ねは師

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

よきん

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

史百番の志 兼ねは師

後媛の家世の志

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

志の志 兼ねは師

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

好志

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

史百番の志 兼ねは師

後媛の家世の志

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん

志の志 兼ねは師

あまをりよそあつていしりあにらる世の改るをん



平黄時英四

清和天皇の命の中しくよわれう人の娘と

前入納言實教

契きく後弟の信をきわつしよるる文をみんが

又保百の哥をけりゆ

二品は祝日足助

多のりちるる乃ちまは後していへるるをよるちゆ

高柏木を

前赤御為實

うりわける人のちるる乃ちしうりれう後れまのりゆ

意乃心を

中務の宗を親日

逢坂乃開路のちるる乃ちけりし我の娘はるる人

よき人

若きときまよるる乃ちまかじりし人のけりし

後京極坊の前を改大木

うりしは後なる乃ちしゆのりし人のけりし

高木木意を

西青法師

かきくは後物成河橋の水れりし人のけりし

赤元百の哥をけりし時遣不地會意

贈後三位為子

相とち成りし乃ちし我の娘のけりし乃ちまの継橋

後意を

後媛家院抄歌

こもりに岩乃るこれく思ふこも後くこもるくりの思橋  
東に東入道持取のれくちるこゆよみかひけふ  
比又節の神は日影のりししすいてこまけれいに  
りして  
右進人好道徳母  
のきくみくまの後より日影草何よようこくくみ持つこ  
又保百る言をけるゆ

六条の人を

うこくちる人の女あつこゆよあふるこ菱の祓まのこま  
開白をぬ人か

いふれがまきしうのんねんこまうりちをを思ひつこ

遇不逢意を

永福門院

こりちるこま成けの契しちちしつあはれこ思ひつめく  
あえ百る言よ思意

万葉門院

契しちあふ一あふつこちるれ又ちこりこ一母まへまひつ

後後縁意こりしを

前入納言通歌

何ゆへよ又立ゆり歌くこつゆりこさよあまひつを  
後後縁意こりしをよりしを結ける

後二重院の巻

余わが父も達也セ先くつと云うて其言をうごめし

取しし

邦有親王

何しとね命をなして達一のうごめし其言を

源知弘

其くふる言をその言にふる物成りし達一のうごめし

律も国助

達一の思ひつゝいふる言を又け我をこの有く言を

其言百も言をけらほ志志

二品は親王是助

其言くち成志ふる言も後ふ我もつとけしと思ふ言を

河津持政家百も言も過と不と會と志

常盤井入道前を政人末

その言も言くつもの言も言も人の言も我も言も

壽鏡志

源重泰

面影乃る言も言も言も鏡にけらんの言も言も

権人細言基副

洞も言も言も言も言も言も言も言も言も言も

宣旨典侍

其言鏡も言も言も言も言も言も言も言も言も

昔みとける鏡を并乳母のしほいにふすして

讀人不知

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし  
弘長三年の裏百も言けける言鏡志

麻久納言為氏

向手鏡おちけりけりあめあこもつらんのそやみゆい

百も言けりは 入道前を致人未

あまのれをいへるよすこく又我こよみからん

用白を致人未

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし

えいし 光後初未

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし

登蓮法師

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし

女房殿子未

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし

津中團夏

つみし思ひくも我は向手鏡をくく人の氣とうりし

又保百も言けり付

休辰隆教

思ふ事もわづらひなきに浦舟のちまひのしりあは  
る中よ

後醍醐朝

うき世もかたけ舟のいじりもこころはれは神思ふ事  
藤原宗秀

人ぞもくもく物成ふ方のことこころもあはれ神那  
弘長百三十九年けつは恨意

前大納言為家

歎徳人をうき世わづらひの事よあはれそまことやん  
源清兼納言

恨し思ふ事あはれ神思ふ事あはれ神思ふ事あはれ  
左大臣

うき世もわづらひなきに浦舟のちまひのしりあは  
る中よ

右兵衛督為家

うき世もわづらひなきに浦舟のちまひのしりあは  
る中よ

民部卿為家

うき世もわづらひなきに浦舟のちまひのしりあは  
る中よ

いしよ  
よみ人しおす

かたにさしおしお世を知らぬ人かすし(よ)人かすし(よ)人かすし(よ)

寛平の時后交奇合の時手い

土原元方

交交しきいしよしよ思く世をすし(よ)人のしよしよ

一色前中よ  
如形法師

しよしよ思ひし物をたに交すし(よ)しよしよ成よけらる

千八百番前合よ  
皇太后宮女史後成女

かに交うしよしよ人のちり世しよしよ蟬のQよ思しよしよ

高衣衣を  
女冠人百代

こよらし中しよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

一人納言良教

介しよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

光明寺も入道前持の家の子首奇中よ

山階入道丸人志

思しよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

素山志を  
蓮ヶ法師

いしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

又保百の言をしよしよ

津も園冬

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく  
歌——寸  
後九条前の人を

契のむわこのめが野のほくす糸意のうらけ娘凡うく

後 巻の殿もこのうら恨意

後 中納言有志

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

後 契治百もこのうら恨意

後 中納言有志

娘凡うけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

後 巻の殿もこのうら恨意  
後 中納言有志

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

後 巻の殿もこのうら恨意

前 人納言有志

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

後 巻の殿もこのうら恨意

中 務つ恒明親と

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

後 契治百もこのうら恨意

前 糸政隆康

うらけらるる家乃のくすにむちりり末も娘凡うく

歌——寸

前 中納言有志

とわらう〜伊とをのわよは恨もそみりかにしきていふまにわけれ  
光月寺もち入道前持政家迄十の言今よ言細  
を  
後堀河院民の典は

と乃わきの細のうを縄とけま〜後也〜いぼる〜  
河院持政家百の言今よ恨意

後二位家隆

床の海柳い〜ちり也〜る〜とちり也  
にむろ〜み

續後拾遺和歌集巻第十

雜歌上

之妻右人良家の屏凡

貫之

いあ〜老也〜やち砂乃松わつ方の〜しと〜し

極を〜て休ける松の年久〜くちりけるをみ

長部之致年親

ま〜也よ年の友と思ひ〜松も〜ひま〜老よける那

歌〜子  
花山院持政

入江をら松の年〜老よをつと枝もみ〜つとも若し〜



命 布引乃滝の滝〜まがり〜ゆり〜ありけり〜

〜まがり〜ゆり〜ありけり〜

鳥の鳴き声

白糸乃世を〜く後の〜か〜る今日乃の〜に〜布引の滝

歌〜し〜す 順徳流し歌

〜の〜滝の白流〜

よ〜し〜す

〜の〜滝の白糸乃〜

〜の〜滝の白糸乃〜

河原左太夫の家〜

〜所乃〜

業平朝き

塩乃ゆ〜

津国吉原

前参議雅孝

〜乃京〜

弘安百々

民部公賢宣

ついで海の花〜

海辺松〜

凡そこの世にこの世の乃ち我にこれの花咲きを

歌一十

平女付

浪やぬまをそかけ我をよらうこと吹雪のこの汐を

又百番言合ふ

大納言通具

凡そ夕夕をいれよはらう入江のこの夢をわし守

歌一十

後三位氏久

わが我やいにしへのる祓免しく我はさ島に信置るを

前大納言実教

いにしへの我にめつる祓免しく我はさ島の言はるる我

又保百言言けける時

前大納言経継

多乃音に尋るる我て同くははれくいにしへのをうり

元日節會古くはゆりく<sup>立</sup>直樂の衆音辨雙

調は春庭樂奏しははらうとけりける

御製

何とわが心よまを考れしははらうるをうり九をまを

考乃考代中

前大納言考家

小倉の考しははらうるをうり<sup>け</sup>わが心よまをうり<sup>け</sup>のけり

前大納言わ氏

いそつる考しははらうるをうり<sup>け</sup>わが心よまをうり<sup>け</sup>のけり

半活用白朮を致人を見おめく休けるは春日の  
使は之ゆく又の白雪のふり休けるは花も花も  
ワれすは思ひこそ我春日野の雪ゆをいづく  
人のこころしゆりし有けるおどろき

法性寺入石朮拵致を致人

いづれも雪のこころし思ふゆはのこころしけりか  
野へは出くはぬちるさ女の雪のふりつる  
にむくをさるけりをみく

中務々具年親

年をこころしつるをいづれもゆはの雪たるわはけり

孝乃言代申日

前大納言良教

未きこころの目ねよりうつくしくなると世の春ついで  
梅花をよりとけりけり

朱雀院の歌

梅花はけりわさつとをわさつと昔の人の春はにけり  
歌し子

後直法師

鶯乃鳴くまじりくる梅の枝よこりくるあつ自ら  
純洪氏初巻

いづくも梢にね梅の多のこころしる春風

建保二年の久老家百の言は梅花

前中納言山家

かりにけりかよしそゆらうの梅花うそく宿の春を思は

梅花さしふんを

田舎郎はな不用白を政人長

梅花りやとうるし六十ゆるる我思ふ先のしりくさ

故マ梅花さしふんを

為道朝来

古まよそそいとし人まゐりまてをさうみりのむ

修ののいあそくは人峯の花をみ分けしを

幸ゆく後思ひ出くよと分け

前入僧正道昭

尋らうの奥乃上梅や世のむしをゆりのこむと

歌しん

前中納言賢實

世をこくせ丹の花ふれしんふう先文の考を思わ

前入僧正禪助

わすみく八十るり也りまをこのこいり花も笑く舞

二重花讚妓

咲初くわつ世よちしぬ花をわの思心の種みくゆ

藤原景徳

先の世乃しにゆら考あしん今しうの染花みくま

源兼氏朝来

我がりありるやしも成志我の老来の志に老見ふく  
又保百る言まけりほ

用白を改んた

今乃乃考のめくみもほるとわりわら宿の花のよる言

春の哥の中より

二匹は親と賞助

産じ度乃月もとも更も思りもくわとるりり月の考のしり

後守め成り月又十さ言まけりほ

前人納言考世

老乃乃の考のしり月の友こそん産なともう世の月乳

産じ度乃月もとも更も思りもくわとるり月の考のしり

後守め成り月又十さ言まけりほ

老乃乃の考のしり月の友こそん産なともう世の月乳

産じ度乃月もとも更も思りもくわとるり月の考のしり

老乃乃の考のしり月の友こそん産なともう世の月乳

中つりけり

檀大は故云頼

りまをち成りてけ我考日山咲けら後の花をみるり

如し

民月乃考後

ゆりまをち成りてけ我考日山咲けら後の花をみるり

夢をよ光る

前人納言基良

かろく入いりぬる世より夢草りけりてさし世方のり世

惟宗忠秀

わが我の神とわが我の妻草子にてくさる江の波き

山家敦らそ

菅原を良納夫

都へ西つらんものを山里に同るるにけりしこと

元喜四年後宇心院は十三年まける所山家

ら

檀中納言云明

くものふかきくさけえこのまよきくさく敦ら那

和言所まき釋阿は九十賀ありけり所の屏

凡よ

直叙門院丹後

は鳥をまきわきとせむけり同にけの神よきく先き中

敦らそよ先ら

小弁

思ひぬいおしり物をほきまの我のまこと思ひくさる

平義政

引くまじまの又月と志まき思ひくさる思ひま

又月也

賀茂基久

又月もよきくの橋を水くしてけりまき思ひま

よき人

くみくの日教もかり也津國のふりくの橋の又月也のま

邦者親と家又十三年まき思ひま

鴨祐夏

又月る夕ゆなり〜みらの〜北野田の玉河はふと〜  
後集よりまじ〜〜〜〜〜  
みづ月つちよ〜或人のう〜〜〜  
ゆけれい  
よき人〜

ちよとんは鳴けり〜  
夏三乃中よ  
照入念院入道前用白老教人未

又十のまり〜  
体懐百らののすの中よ  
皇太后官を更後成

埋れ〜  
夏東頼氏

歌〜

夏東頼氏

袖よ〜  
光明寺も入道前抄教家の娘三子〜

淡路門地抄

〜  
赤元百〜

法中実考

心わ〜  
歌〜

娘〜  
娘〜

文永八年七月七日白河殿より人々を召さす  
つとく尋にりうまにりつとけりつと

後媛山院抄巻

墨染乃袖もたねやうつと師に古をよまにけり疾もむすり

くし子 とも人し子

娘萩いさすくをいふつとよかうつとくはむせんや

新院抄巻

今乃乃よそよつにけり娘弟乃よそ地の弱かふつとむす

古所門院抄巻

七と乃娘のこころいふつとよ司つとよ我月とらうは

山里よりく月をみくくもえり

ふ所

山里のわれがら宿を照しにけり世入也し娘の月け

中宮とつとよと娘いける此所所のちとらわつと

うく妻をいかりたへて同しけるは奏いふける

二所法親王慈道

茅のうへ娘乃古山の月けりもよゆくの力をとてし子ハ

前大納言室房家よりく月すまも尋換はけるよ

野月 控律師律弁

古乃娘もあつてうつとらうの月けりも



歌一十

津守棟國

まろくける名を乃なるこのあはれきとらるあしの初月乳

各所言後付けし 津守國助

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

月の言こくくく 藤原親継

久く乃月のかつこの後れまじくれと後思ひみらるあきつ

月最若こ云まを 信實納ま

かこくく月よきこくくくくくくくくくくくくくくくく

歌一十

古所門内御歌

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

よこ人一十

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

大江宗秀

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

山田法師

まろのちもきこの後文川とくくくくく月よき

歌一十

基古後

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

又保百の言をけりし

後西園寺入道宗長

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

檀中納言云雄

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

あはれきりしは乃老のまげさよはかたきりくとも風娘と

楠仁親と

枯くしつゆ芽を産らうて何とわらわの事とあは  
信實頼来

けさより大阿るい雪よ成よけきささくは松の冬より我と

弘安元年宇治橋供養の日飛鳥院の事

けりさ雪りくちうう波かけ我

西光院入石前園白を致人未

あまの屋は海はうらもくふのさゆり我法を御と

弘安元年

前入信正隆并

いづくも法をささく白雪乃ちうらゆるさすくさるる力多我

藤原基明

いぬいぬにわ我が老くりにくくと我力成うと也年と言ふ

山階入道友人未

今更よわくとも心くさより思ひ一年のそりあ我こと

弘安百三のちけりよ

前右兵衛督為教

いよつとくつと昔くむ方のいよつとくつと一年

弘長百三のちけりよ威暮

常盤井入道前々致人未

かろつと今年とよく言はけり花の月よ

源と一

續後拾遺和歌集卷第十六

雜歌中

歌一十

古所門院少輔

志のちち心乃うらと久このそめく同なる月の上

前中納言定家

ふり先に思ひの枝よしるそのの娘よの月

殿富門院久輔

うそ世成とあこあなつといふ我は悲しなる娘のよの月

長恨三の三よりよみはけるよ

通令法師

思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと  
清女納言信水よこむらこ依ける比<sup>月</sup>づ<sup>月</sup>あわ  
きんすつりけり

法成寺入道前持政を教大夫

思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと  
乃安百を言はける時

式部卿左衛門

妹をへく花こちるものく別はけり月より女の思ひあつた  
えーしす

平宣村納衣

いかり思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと

土官京孝標朝来女

行乃乃の思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと  
文集車嘗深鎖白雪同<sup>田</sup>いふことを

土佐門院左衛門

若海の草乃乃の思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと  
幽行者を

伏見院卿

いづれも思ひつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと  
大寺へ入るくよを依ける

大僧正行尊

山路のつゝ乃わあこよをを動く可しつと都の月をえんこと

源長後初志

源長後初志

世中乃其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

宗連法師

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

白雲の申す

式子に親と

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

弘長白雲の申す

前人の言を為氏

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

寛治白雲の申す

前人の言を為氏

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

文保白雲の申す

前人の言を為氏

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

山家乃其を

前人の言を為氏

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

後京基徳

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

惟宗忠景

山里に於て其のつちのこも山里に於て人の後まをりて

前大僧正道玄日記法親王入道すめけり女  
一々の言れ申す  
源兼氏朝来

うりりけりみおの松より子やをねりまけり人々も  
愛治百も言まけり松山

長二位成實

いぢりしむらゐれいづ方りて松木の松は年の人也  
連懐の心を  
高階宗成朝来

わらぬ若の松を世りけれ年さじくしれり  
前大納言為氏

まゝ世乃ちのいさゝのまゝあゝ悔ひかばふけり

前大納言為世

こよかくに二の心を思ひしう世ふじふるも  
前大納言為世  
春日社三子三子中

民部卿為友

方利しむらゐれいづ方りて松木の松は年の人也  
百も言まけり  
前大納言為世

もいふ草もわにむらゐれいづ方りて松木の松は年の人也  
歌しす  
平貞世

いひをるゝわの乃浦のいづ草もわにむらゐれいづ方りて松木の松は年の人也  
源三氏

ついでにわくも成しと世交いしついでに留れわりの海波

藤原純秀

叔母あまにくにあつしついでにわりの海波はあまのあまをさぐりし

大江常廣

白浪乃より人たきしついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

依後隆教

うさよのそ神いあつしと世交いあまのあまをさぐりしついで

赤中納言定賢

あまのあまに思ひついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

は眼源兼とついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

送つにわけておくれ

は眼の海

ついでにわりの海波もあまのあまをさぐりしついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

と

は眼源兼

わりの海波もあまのあまをさぐりしついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

歌

夏長遠

ついでにわりの海波もあまのあまをさぐりしついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

あまのあまにくくく七百さうりついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

檀中納言云権留りついでにわりの海波もあまのあまをさぐりし

丹波忠孝朝来



ワ乃海の世をその世を先の派又まいに道うりこと

歌ししす

は下隆嗣

力いりくうにれあるを妻嶋の道よう世のなみけ

は眼慶助

思い河後あるのまごころの種のをこと

信都遍救戒摩をわつてはけるを

のりすして

前大信正明き

家の凡吹くをさうのいさるか

ふちよはけるは又えまの序より

りくわすしていはけるは橋の

いふすして

藤原言克

末乃世ふかりをくゆを柄とし

外記藤結政彦は古宮の櫃の今まの

いふすしていみくよ

中京師克納を

いふすは都のまにのころに信の

天平勝寶四年聖武天皇九十八の

いふすは

井のたを

漢りいふは宿た大毛のほ

うのりをのこも三つにう





わらふかへ何とあつらひのこころしきま成つたあまの好

上藤原真凡

白波をかつとりをわまた博みい下よふふみか先りりよ

言の船述懐を 讃天門院

いつたきよる入こころあまを舟浮世の流は舟しんりて

伏見院止観

うさ洗と世成うさつらあま舟れゆく末さくぬこま結を我

前住正通性

を舟こく渡乃わ一回ごとす我いりりる世を袖いぬ我け

水福門院ゆ

心もあつ

ほききと掉ううらる何舟のあつらゆわぬ世を流るこ

述懐百と尋とよと依けるよ何

皇女后まを更俊成

ゆさけとくもせつらういる舟れきうらうこは思はゆ

嘉元百と尋をける何れをんを

前左入を

秀つ世よあつらゆけの流一まじうの愛はしやこ

歌しうす 後京貞忠

名よりけいりるる流より影我て方の埋木の人は志し我

世助は親と家又すらう



く休けぬい 清原元輔

あつしは思ひうちて衣河りらきよそ袖と思れり  
うのこぬをきまに送るして

人納言猿人

あつこぬを人よふきとてわひきするもの男はよふわら  
後原那信朝を條原文宗の舞人しく休けり  
見車よりわらこのにまよるてにけり

よみ人

いふくち成りあつしは思ひのわらひの衣とて  
前中納言定家お家の後又高のうを送るて

西園寺入道前々政人

思ひにやけりの人れら平にをのをり  
如 前中納言定家

江原と何うととわらとてきふをいた日敷のこ  
昇殿いまこゆをこれわける比は吉社と清く

ちけり舞中よ 正三位重氏

天津何れ乃と何とちる人きくをしめの安今年  
よ又百番の合よ 前中納言兼宗

位つちよ申くのわらとてきふとて思ひ  
如 丸道中納言兼宗

ゆゑにすくはしむるはたけのまじりて捨つ世は  
よかえ百とす可なけりは速懐

信三信考信

しるしとまよひにふる板を我の身よ多くこめし世成り候

前大納言實教

とろりちり人など捨思我志世をくち頼め方々に我事

百とす可なり候 前中納言定房

しるしとまよひにふる板を我の身よ多くこめし世成り候

御書

世にゆかり民がすの我の祈しを我方はしるし思ひはる我

文永八年白河殿よりくくをすくはしむる

しるしとまよひにふる板を我の身よ多くこめし世成り候

後大納言定房

しるしとまよひにふる板を我の身よ多くこめし世成り候

世にゆかり民がすの我の祈しを我方はしるし思ひはる我

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '信三' and '信考'.*

續後拾遺和歌集卷第十七

雜歌下

百首言りしは

用白を叙大夫

志にのちる老乃秘え思ひ外く君より後う昔るわけ

歌しつと

後守め院中歌

昔うく老しつといふけ我大老のおえよ思ひおし

嘉元百首言りしはけしむくよけ

の野ぐしつと後う老流のちるじつとの名しつと

懐旧の四を

旅人納言為家

まろくち成り乃社のみめ縄わの我昔をりけえ志に

法下定巻

あつとをじつとつとつとあふゆよ又十月日のうにわわら

海ら殿の七百首言り懐旧此しつと

指中納言と雄

かまろしつとをしつと思ひおれりつとあつて我う老あ

老後懐旧しつと

津守國助女

いふを思ひ老のちるしつと思ひおれりつとあつて

百首言りしは

二品は親と賞助

昔うくあふるなしつとあつとあつと老の心ア守老



恋しき子

は下良宗

思ふ乃ちわさよとふもよとを色しき哀いりけり昔あらし

平宣河納忠

おもひ出のわろよいあしね古のきこりれりやあしりもこ

藤原義雅孝

ききしわつ、昔こよ色しき老のゆきを思ひしを花

藤原秀茂

よみ出らつ、せ乃我のじつこよ思ひこきり下あめり月

山階入道左大夫家守三つよ懐書

藤原納言為氏

るけり西十あまりの物あこにる成思りる方のじつこ

甲しき

藤原納言為世

かしを投く今も思ひ出く思入いゆらじつやん

又保百三言まけり

前持信正書雅

めくあくる月日にあまり月日よ思ひあらしじつあけ

恋しき子

藤原秀賢

あまのあまの月日をこきよこよこよの面を

能書法師

思ひあしき思ふもよのあらしとあらしつれ名あらし

源克行

思ひ出ら道しそつれ人しよ思ひ出る昔ちりきつ

普光園入道前用白家十又三言に月あ懐旧

いみじきを 源兼氏納書

月よしそつ方の花い志し我けき昔を思ふ輝をかこひ

後宇ゆ院も月あすそ言りなけるは

民部マ考夏

思ひ出らつとく月う思けししつと神代なうさうさ

又保百首言なけるは

二品は親日克助

もろくちろ危乃ちうのーしとあろい毎共枝やかり

舊枕古衾誰と共こいつらしそ

前大徳正慈徳

いよきつさつと神をさつと光同うくはるくもやかり

歌しそ 夏原基夏

伊たはしめさるまも地水よ力成うさ草いさうの我等

後光明寺も前持取左大卜

みるとうしじふ鏡の輝の影おしうくはるくもやかり

弘安百つ言なけるは

大蔵卿隆持

かゝりし年乃思之

前大兵衛傳為教

いふ世のめらにけし思入の子を

歌一十

律也國助

もつれくしにけるまのふ人

成尋は師母

投るねまを

は照の胤妹

うよけん

昭慶門地一条

投るねまを

かぬし

讀入

頼わら方のゆ

十ら

歌一十

邦有親

たわし

前大兵衛傳為教

くら

及安百

無心流し歌

まじけまりの橋たふしく世成らるる力を若し

述懐五のうら

中務の宗意祝

世の中も開くも物をたうらうたをさるる

よき人

世の中も開くも物をたうらうたをさるるの輝けのおま

言ふ述懐を

旅人信長良

我なりけのあはれみうらうたのうらうた

おの家のうらうたをたうらうたをたうらうた

後周ち入道前を故人

思ひつらうたの月なりけのうらうた

歌

森蓮法師

すみ寝ぬうらうたのうらうた

ねむ

あはれうらうたのうらうた

よき人

うらうたのうらうた

旅人納言為家

あはれうらうたのうらうた

賞懐法師

教をねがふにいとほしむるにいとほしの世にいとほし  
乃其百を言まけるは

二品は親と性助

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

は中定回

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

歌一節

藤原長行

力到にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

祝部氏

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

藤原春宗

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

平氏

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

永尊は親

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

大江原

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

吾師

いふ世にいとほしの世にいとほしむるにいとほしの世にいとほし

源宗氏

思ひつらふ事もなほついで方のこころに世を歌子  
弘中百三の言をける時

安土門内宗

るまゝつらふ事もなほついで方のこころに世を歌子

連懐のこころ

信少信妙良性聖イ

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

信平も宗

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

禅心法師

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

信二信三

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

入道親王の賞

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

又保百三の言をける時

信中約言の権

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

信一

信二

ついで方のこころに世を歌子ついで方のこころに

法下田作

のつれつゝ方の……を歎く……  
長阿法師

こよつに……  
長原盛徳

老の世も……  
行人法師

是の力……  
寧相典法

まは推世乃……  
墨溪の神

世とうし……  
草花

そ人の……  
修門院大貳

修門院大貳

高よわへぬ野系乃草花……

宣教門院……

政の……

前入信正慈鎮

家を……

ゆ

後京極……

よそ……

かゝるふとけつしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

源季廣

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

津守國文

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

贈兵三後為子

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

真子院の長恨哥のし屏凡

伊勢

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ

いふらふしんけつすしんまつていふはけれ



中長祐春

わしろのぬら万果のいりちりん此世りわを爰よるし  
山階入道丸人を家すら言よ高爰述懐

源兼氏納衣

うきうきとや爰うといはるまはうつゝの程なるん  
歌一子 爰饒上人

爰乃中爰ともつゝも爰おれはえなひ爰とも山にを止れ

僧正行親母

現うくうつ乃いりなるりをうきよはゆきと爰の世おれ  
檜入信都浄道

みくも信有う山にを止る小爰はゆきとの昔なるぬい

入道前右大臣

りやゆらにゆきと爰の世よぬいおしるるこ我方ぬしと

は事仙爰こりしと

普光園入道前用白丸人

るうきとぬいおれうけとつゝと爰よぬいおれ

右通納衣

らうきと今せうにぬきおしと

るうきとぬいおれうけとつゝと爰よぬいおれ

續後拾遺和歌集卷第十八

哀傷歌

哀——と

中務大臣の親

人の世はつれづれとよのの思ふはたかくふ哀にいそ

大納言師成

水の面はうらやまふらふらとて思ふはたかくふ哀にいそ

源重光

水の面はうらやまふらふらとて思ふはたかくふ哀にいそ

後二位家隆すゝ免侍の歌の中は重光を

正三位家

人の世の果はしるはたかくふ哀にいそ

哀——と

後原隆祐納言

人の世の果はしるはたかくふ哀にいそ

人の世の果はしるはたかくふ哀にいそ

免侍

後原重光

人の世の果はしるはたかくふ哀にいそ

謙徳の方はつれづれとよのの思ふはたかくふ哀にいそ

口談休け

後原義孝

人の世の果はしるはたかくふ哀にいそ

世中のけつらふらふらとて思ふはたかくふ哀にいそ

太宰大貳高志

はよわし我方の考はわしは凡花のくらしは  
と信也の思はしは花の比花わしはけり  
にりけり 堀河院中言

墨原の神のちりことちり花にけり人の志りし  
為通切り方るりく後又月又日贈短三信為子  
の海よりをくちりる 権中納言の宗母

後寸が成りけりうあつめ草刈り花の  
はり 贈短三信為子

わや草刈り花のうふしはけりうあつめ  
はり

萩多りの家し凡の吹かけり世中の  
わしを思ひにけり

増本宗法師

いにしえ凡よりうらう萩花の志葉の春にしるわ  
観身序類雜根草言花のうを始よ  
て淡けりの中よ 和泉式部

花をみく草葉の上よはりはまにけり  
の命をけり  
はり けり

胡麻いきりのつと有也しは世成れり  
大江山衛納を力ゆりく後石は

道よし陰なるる草の春よ朝日共すくさるをみく

赤染東門

朝日さすし下座の陰る月とみや花よりいえしりりたる  
贈後三位為子方ゆりくりしての日辰すま為後  
すく先付けの哥の中よ月前思故人こりつあまを

後三位為理

ささりたるみさきとくや秋銀花のこす娘のよれ月  
社母方ゆりりしては性もたより所よをくつとを  
けつ秋月をみく 隆信朝ま  
すみのふる月と娘よ是もささるるこけのよるあまを

長月乃末にこし意極花のちいみとそく人くゆ  
つかつれけりよ後付け

山本入道前をぬ人も

んちる国とこしそくゆれちるあまをいりうさ  
母の思ひよて付けの時後京景徳の許よ申に  
しけり 前入信正禪助

わすれぬ杭のまわりは思しと下葉よのこる春のゆり  
ぬ 後京景徳

枯よけささるるのまわの春思しとゆりこきけり国共  
ちる人ささるる思しはあまを

在嘉門院人貳

あつきのしほゆら衣たゆりちとむしりてとくふとむらむら

前入信正も参言方よりわけてはるる

能言法師

草乃しけれそ頼め衣た方の玉所ありたりよに考くも

歌しし寸 前中納言為相

清又し草のしけゆらせしむらひとこり思あつきの房

伏見院より我もせりての比はるのしけれしを

行しけり 院中製

衣しけしきのしの娘は衣なりわく也袖を又しけれなり

歌しし寸 惟喬親王

あつきのわれゆら宿をこし我にむとるしむらむら

後嵯峨院人納言典侍の女方ゆりての比

九条九人侍女

くみくきるしせしむらしむらこの袖は又も原し

又乃みこの服也してゆらゆりて依けるは後て

むらむらとせける 女侍子也

けしゆらむらみまきに墨染の衣た袖をおひやう南

上束用白方ゆりて後言衣連懐こらしをこ

あつ 高階宗成納言

形とそまのめつちけれも違はるし思書候も袖  
養福門院かくれと後平後中忌日よ申誦行の  
使しと奉議親降つしよいそくつとけ。

皇太后宮人丈後成

墨條の袖をつらほくまこり日敷よと別あるかれ  
わいしとまはける人の力ゆかりと付けれよま

高陽院丈綿言よ

胡夕よか玉亭のこほつていしととちとちつれ  
沐五月の廿日わよかりのは養他三尾思ひとけ  
けり我つていしとけ

周防のめ

いとやし言のこもまふりけるまろれと一此の別を  
ぬのえと男のまをこ解りまらとけ  
よま

今うこいといわつれ一えまれにまらけははま  
わいしとまはける人のまよりこまらひてのめつ  
もちける女京とてりまらけは後枝男  
むしとてりまらけ

信せは師

かゝるの乳つみやし思書水又わよ枝の用いあやし

わじふにふくしてゆひつらよふけのほよえ

後原雅歌

思ひつらよふけをうらむがしゆく又わじふの用こしこ

贈後三位為子方ゆかりて後前大納言為世

にりける

前信正通性

思ひつらよふけをうらむがしゆく又わじふの用こしこ

也

前大納言為世

思ひつらよふけをうらむがしゆく又わじふの用こしこ

思ひつらよふけをうらむがしゆく又わじふの用こしこ

後宇治院御歌

みづのさしわりのれをそくまわりのころもみいひを結ぶ

欽哉園橋政方ゆかりてのころ換ゆけ

同光院入る前用白々歌人

目乃あよつりも枝も枯れをうらむくらまたけのころも

方ゆかりてゆけのころもあつりの日よえ

よもいへ

いひつらよふけをうらむがしゆく又わじふの用こしこ

小方うらむのころもあつりの日よえ

九条右大臣

切らるる月日の乳いりてわじふ我庭のこしこ

戒法法師より仰りみけりのら指中納言敷也よつと

しけり

貫之

明言くこの年多るゆと思しと信世中の後よろしく  
一は後子方ゆりゆく後前右大夫室行しゆく  
又多かり也と聞て申しけり

前入信正是也

是てわ後路は後を因りてゆいの中に信よりなる  
家より白く言りてと依けり也

中務の宗尊親也

いふえり思ひさうし現にも著しとたさくは世なりけり

歌一守

前大納言為氏

世中いみじきくう執柄我思出の我もく人の現と  
西行法師

るこ入とあるを思ふと世中の暇のうらみ後こそそ我  
西行法師すくもくも依けり百三の中

前中納言は家

世中いみじきをやうの御鏡

みづのわしと執りし



續後拾遺和歌集卷第十九

釋教哥

歌不知

前大僧正慈鏡

は乃門よ心をいれて思ふのふらうと世をい出(り)りけま

ふちぬほつていけけりま<sup>は時の</sup>い<sup>は</sup>まうとく<sup>た</sup>経<sup>た</sup>淡

を因て

和泉式部

物成の思人の家を女くころのこははのあまき<sup>たまき</sup>に<sup>た</sup>け

あえ百と三をける両尺教

前大僧正道玄

まゆりゆいゆいしは女をまつとこころのこははをいん

歌一十

中務<sup>つ</sup>宗尊親王

悟<sup>さとし</sup>えゆいの外よ思ふとあををとく思ふをわをれ

皇皇義経の心

選子の親王

かくりり人のあらしはゆりころ佛れこをいしめける小

久安百と三

皇太后宮人支儀成

りるふと白いけりふはの花後のいそとをねありか也

源家長朝きすくあはけり一品経の言中二序

品

前大納言為家

ゆりゆり思えれえよち花の御はのあたりあをわをて

是は位法位世同相常位の心を

了然上人

いかにいふも多しそふりけれうへ一ゆりけり水の梅見え

十如是のいふよき依ける中よ如是報

後京極持政前々教人長

すまはげり世つとやにいとよきひの叙しとる事しあつたふか

信解只 前大信正實超

ちりあうんごえけりうのりうあふの草たゆらふ

藥草喻只 信於源信

あつし一味のる乃ちり也我の草木と人佛ころりたる

法師只 鑑子に親し

え子みくんのしけりさ中よ有切の月たきをうゆ

則如佛現を 人親つ隆暢

ちりあふのわらわらう人そさけり月のえるあを我

不輕只 前大信正通昭

冬枯の枯いなるあさるし松よろこむる花もあ葉も

妙音只 堀河右大臣

しりしとる人をあつと思ふに園なきる事ゆさう有る

嚴王只 法下悪實

何るわしとのれうけうふ松原木下春のいたうめく

祝部成仲

あしちねをゆき女房すしめ今にいりりちうれくるん  
歌しあす

前入信正親源

思ひうちちりしにのしりゆきの道れまはる

釋教三つこく 律也國道

まじり我の中くほろゆいけり言の果とけしほのた志

法下道我

あつて花咲う乃よ入しちりあすいの春月うちを

大日印住心品秘密し自心為末善提乃

一切知何以故本性清淨故のすを

法下志

花乃多家の光をぬいぬくともしよりほろ月う富我

如實知自心のすと 前持信正空願

うらふて今しそちめほれなまよふ法のゆしちりし

阿字観を 前信正朝

夏乃中よちよいのしをこに我たさじ我あの一よやちり

不妄語戒を 持僧正聖言

はの園乃ちよいのしとゆい後のせけりわこしをきけ

ついにいけり以案昭上人よわいて戒受けし

程多くゆりけ我ハ 三條院女院人左也

ちりよ乃しよのゆしちり我をよしちり我わちち月乳

十戒守りよきゆけり中よ

宗法法師

ちよよをいつにわかれ照すししるしをよきとす月氣  
又保百の言をけりは

二品は祝日免助

静けなるあつらの中にするけりやえお月い霧へふりこ

歌しらす

は性ち入道前用白々ぬえ

照月いのかつらわつ物をちりしつものようよみ

道基法師

月いのかつらわつ物をちりしつものようよみ

前入信正良信

月いのかつらわつ物をちりしつものようよみ

人全對般若行如ま者無所従ま亦無所去

こころを

法守守禅

つるしと入るもみして是川のよれおのよす先れ月氣

無上善提揚誓願證を

千觀法師

よのよかみれ月をりしあつて我方のよし思ふよの

歌しらす

基後

うかみれ月をりしあつて我方のよし思ふよの

久在百々尋よ 上西門内書末

あまのまはつかりいすしめしといひぬるこよぬえこほん

唯識論今出唯識深妙理中得如く實解

故他比論 前僧正實聽

妙なりこしりしりの内す鏡にけりまける法よりこ

未得真覺恒處愛中のんを

前人信正範無

ちこよ我様さあつてあやうらの後にしとれら愛うに我を

歎しぬす 後壇家法出製

愛乃うらよしめしと思ふんよとまこみ思こころ現るちを

ゆききのよりとあうしけりよ

後字ゆ流出製

しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

歎しぬす 信正道意

法乃道し我をくそしりしりしりしりしりしりしりしりしり

一流の法門を傳ふける付

前人信正慈勝

法くすしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

歎しぬす 天台座主兼是法祝也

法くすしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

源空上人

カッパにけりてよき念ふにけり

よき念ふにけり

續後拾遺和歌集巻第二十

神祇歌

左神宮によみくまけり百三三の中

皇太后まふま後成

つげゆかききこひのまね多き心さうま

歌 十 権中納言師付

神凡やいすけり人まわすいすけり代々を

る清水社言合よ保を

前納言隆房

神内けりいよまねりよ人の拵りよま

其の一社よみくまけり百々言申の後

巻通初末

ワヤリテ人後乃こそ一のささるべしは一人一巻の昔也  
賀茂條村文系試樂の日舞人々の所お  
そしは流しとておしける

此巻

其のしとてゆい推以よす所は人々のささるべしなり  
松尾系村事并りて参りゆけりとはゆえ  
くておし入ゆけりといつりける

前左巻末巻唯古

夕夕けてす乃とてや出に松の尾よとてゆけり  
一條流す村の例も後一巻流春日社なり  
幸あつとける村と東門院ありてゆい  
けりとは成ち入道前持ぬのささるべし  
春日野のまきとてゆきとてゆきとてゆき  
と東門院

是れこのまきとて春日野のまきとてゆきとてゆき  
神祇を

前人納言為家

まの物乃しとの社の神祇ありてその社の思ひい  
春日のまきとてゆきとてゆきとてゆき

よき

中尾祐春

春日の代々をかうしていつくろわくよみ政の存いものす

歌一十

前用白丸人末

九条

初まはれはくをこつとくは守りて代々の申しいふて

後之東前の人長人およわわく春日社と神録

いけりつおごもたてしよと依ける

入道前々人末

今より<sup>そよ</sup>はあすの危乃と世よみと神の志るこ

社頭祝を

津守國助

神垣やみくこのよとつうくまのこころいふと神楽

社頭雪のいつらんを 辰之屋氏久

いれらるゝと年をいふととていふと神代松よゆきろ白雪

回東を身々后文は吉社とゆきとゆきとゆき

依ける

康賢之母

後吉乃松と園くい年をゆきとつるまののよとていふ

上東門地みり社とゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

よと依けるはゆきとゆきとゆきとゆき

古所門右人末

後吉の屋女婚松りつよゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

保元二年十一月八十嶋よふりけりよ後吉社



くよみかたけら 大納言行房

毛の代乃志ろーこころみら位者の松吹凡とのしをりり受実  
後京花衣納ま橋津ちまぢりく位者社も初  
て條内女をこかみかたけら村松の本より物申  
けりあ〜くよみかたけら

津也國基

ワの身も種もいゆ<sup>み</sup>我位者のまをこ松の信より我  
位者<sup>社</sup>もゆりて〜よみかたけら

道深

まねも〜こま<sup>し</sup>ワの国よいく代(也)すみりの種

く〜す 平時香

すみり乃屏ぢる草り〜けりこも種よ昔の記を忘るれ  
津也國通

ちぢる種よにま〜後の記はよ道をもいマい先  
又保百々言なけり付

民部マ為後

けりくつと照す日吉の歌を我〜こころとわ〜しあ地の清  
林祇の言〜くよみかたけら

後膳の記也也

あ〜〜けり日吉の歌を我〜の〜けり〜こころの〜

十禅師まよふりりく後休けり

前住正道玄

井垣よ有切の月をみくも移<sup>ス</sup>傳しのちりんをそしは

前住正道玄

前住正桓守

いよの世もあはれりつる教すき光をうへくのつとま灯

歌しり

入道親と云同

ねくしよをそみ舞のにきて傳れよと云の我も志しり

祝部成久

つすくまいのちめをさけて今りあつる神のせのゆりん

前住正桓守くくすく先く日吉社よく三

寺合し休けり神祇

法下も衆

わくしれこいらつゆす神と思しきく九しなにもりくはを

鳥羽院を付る事と女よいひりきりて休

けり此の野社よ養てよ先

仁後法師

わくしれこいらつゆす神と思しきく九しなにもりくはを

そのらるるをわくしれけりしん

春日社よよみくまけり三の申よ

妻高門院高女

其のくうじくうのちんくちんをたれも其のちん

元大納言為世

後乃世も其世も其のちんくちんをたれも其のちん

神祇をくめり

祝部氏

にくくく八十よりる其のちんくちんをたれも其のちん

津吉國友

其の世をたれも其のちんくちんをたれも其のちん

又保百よりる其のちん

檀中細言の雄

ゆひひくく其世をたれも其のちんくちんをたれも其のちん

歌一十

度會常良

民乃為世のちんくちんをたれも其のちんくちんをたれも其のちん

百よりる其のちん

用白を改人

天地乃其のちんくちんをたれも其のちんくちんをたれも其のちん

歌一十

片割

皆人のちんくちんをたれも其のちんくちんをたれも其のちん

清浦朝長

早しるくく其のちんくちんをたれも其のちんくちんをたれも其のちん

日本紀を記ししとみくしん

賀茂久世

是年(わ)の(く)して(る)月(に)秋(代)より(を)一(り)み(る)し

録しし

録念右人

ゆ(に)ま(ら)つ(る)松(原)も(ち)よ(け)る

いく(代)あ(ら)し(る)玉(津)姫(も)ち

不  
正字二五之換)石川澄正  
慶長三年  
此書九二五之換)



